



TITLE:

人文 第44号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第44号. 人文 1998, 44: 1-52

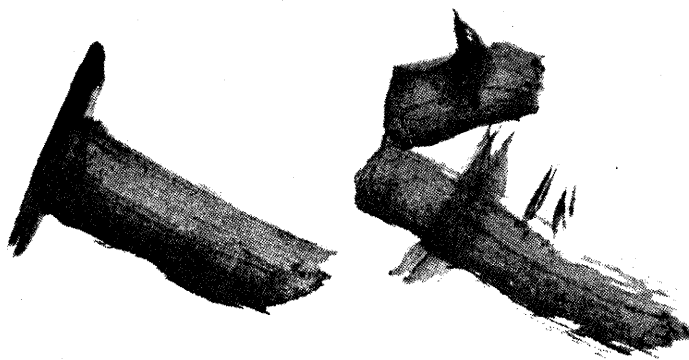
ISSUE DATE:

1998-03-31

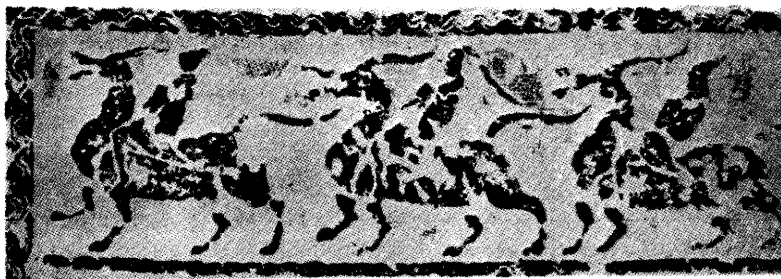
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57170>

RIGHT:



第四四号



1998

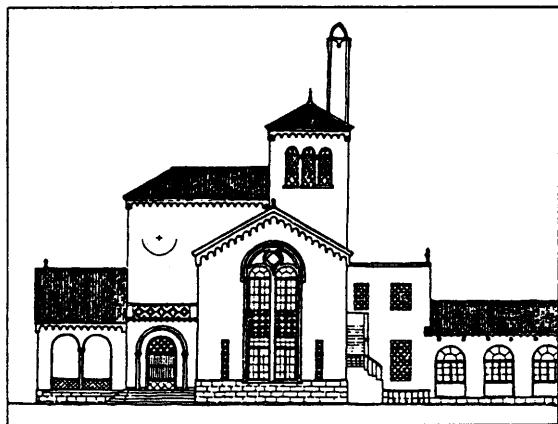
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第四四号

1997年1月—1997年12月

も く じ



随想

史料の読み

飛鳥井雅道

大原孫三郎と二つの研究所

阪上 孝

新しい京都駅

フィリップ・ハリス

分館改修を終えて

曾布川 寛

講演

退官記念講演

13

王安石の周辺（梅原）／誰それはしかじかのことを知らない（谷）

夏期講座

16

アジア伝説―神功皇后からハリマオまで（山室）／江戸期庶民の朝鮮像（トビ）／明治漢学者のみた儒教の祖国（陶徳民）／日本語論のなかのアジア像（安田）

開所記念講演

19

中世ヴェネツィアにおける市民の「家」（高田京）／一九三〇年代の日本とジェントルマン資本主義（籠谷）／大乗起信論批判（荒牧）

彙報

25

おくりもの（25）計報（25）人のうごき（25）外国人研究員（29）招聘外国人学者（29）外国人研究生（30）東洋学文献センター講習会（30）お客さま（32）

共同研究の話題

33

「唐代の宗教」研究班

吉川 忠夫

木簡の墨跡をたどりながら

矢木 毅

「植民地主義」と人類学

山路 勝彦

所のうち・そと

36

神戸と六甲

新井 晋司

英国滞在の様子

安富 歩

イタリアの図書館

高田 時雄

ソウル訪書行と扶余の旅

金 文京

凍ったきこ雲

大浦 康介

オペラ座のストライキ

森本 淳生

雑感

高崎 隆治

書いたもの一覧

42

史料の読み

飛鳥井 雅道

「議會は日本国に非ず、議會内と議會外と、是れ日本国なり」に始まる中江兆民の悪罵を、東大赤門に入っつてすぐの明治文庫で読んだのは、一九六〇年の五月だった。「議員と非議員と、被選人と選挙人と」の關係を説き、「大工左官」へと続けてゆく文はなかなかの名文である。五八年に研究所に入れてもらつて、せっせと明治文庫通いをしていた頃だった。あのころは、『東洋自由新聞』まで、何の制限もなしに現物をめくらせてもらえるよい時代だったが、六〇年前半から夏は、一八九〇年の第一議會の論議と人の動きに熱中して新聞を読みふけていた。特に五月にこの文章に出会えたのはうれしかった。

一八九一年（明治二四）の文章だが、第一議會で民党が崩壊する時期に書かれ、議會への不信が兆民の文全体を覆うが、とくにこれはきつく、だからこそ氣に入つたのである。

そのころ安保条約の強行採決が議會であり、民主主義派は、いまや条約への賛否ではなく、議會制民主主義が問われているのだと、大合唱を始めていた。わたしは朝鮮戦争が終わつた年に大学に入り、三回生で五五年体制の成立を経験したものとし



て、戦後議會主義はあまり好きではなかった。民主主義、民主主義と叫ばれると、議會はそれほど信頼してよいものだろうか、不思議だった。社民党も安保条約は認になった今は、またややこしいが、とりあえずは置く。

兆民としては、この議會への不信を、議員辭職へと直結し政界を去るのだから、この論説はこの時の兆民としては、兆民なりに整合性がある。しかし、民権運動の全体的目標が議會の開設、法秩序の確立、にあったとすれば、兆民の悪罵は逸脱としか評価できないことになるだろう。少なくとも思想家・兆民の根本的矛盾はそこにある。わたしのように、そんなに簡単に氣に入ってすますわけにゆかないはずである。

だがわたしは、民主主義大合唱の中では、悪罵を選んだ。というより民主主義者のお体裁の前では、反発のよりどころに兆民を選んだ。六〇年十一月の『人文学報』に書いた、始めて思想史を対象とした論がそれだった。

状況の中で史料を読むべきだなどとは思わないが、わたしには状況の中でしか史料を読めなかった。いよいよ退職となって自分なりに兆民の決着をつけたらと思う、改めて兆民を読み、伝記を書いているが、ここはやはり変わらなかった。四〇年前の読み方を変えたくないという、老人の繰り言であろうか。それにしても勤務もできない敗残者に、コケの一念を続けさせてくださった皆さんに感謝する。



大原孫三郎と二つの研究所

阪上 孝

四年間の所長在任中、とりわけ全国研究所長会議会長をつとめていたときには、研究所の創立記念の式典に招かれ祝辞を述べる機会が何度かあった。そのたびにその研究所の成り立ちと仕事を調べ、おかげで研究所について多少は詳しくなった。

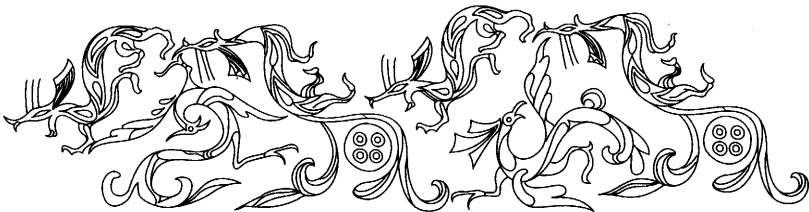
科学技術が富国強兵に有効であることが認められるにつれて、科学と国家の結びつきは緊密になり、欧米諸国は十九世紀末から研究所の設立につとめた。日本でも第一次大戦の勃発から蚕業試験所（一九一四年）、東京帝国大学付置の航空研究所（一九一六年）、東北帝国大学鉄鋼研究所（一九一九年）といった具合に国立の研究機関の設立があいつぎ、一九三〇年までの十六年間に四〇あまりの国立の研究機関が設立された。文部省編の『わが国の学術』（一九七五年）は研究所を、特定目的研究所、大規模施設を中心とする研究所、高等研究所、総合研究所の四つのタイプに分類しているが、この時期に設立された研究所はほとんどすべて特定目的のための理工系の研究所であった。そんななかで、異彩をはなっているのは大原孫三郎が研究所



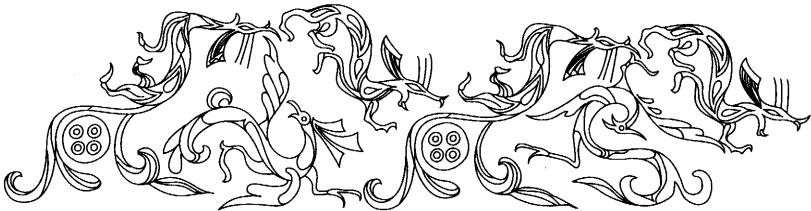
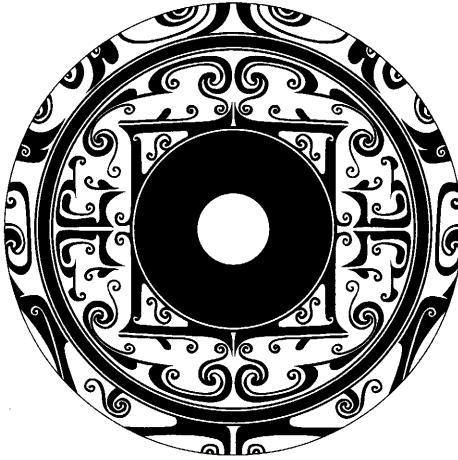
の設立に示した情熱である。大原は二千数百人の小作人をかかえる大地主だったが、小作人が陥っている窮状を救うためには農業を「生産と経済の両面」から研究し、農業改良を行なうことが必要だと考えて、一九一四年に郷里の岡山に大原奨農会農業研究所を創設した。さらに大原は、米騒動に深い衝撃を受け、日本社会の根幹をゆるがす病根をつきとめ、その治療策を見出すために、一九一八年に大原社会問題研究所を設立した。大原は社会問題研究所について「この研究所は世界的に立派なものにしたい。自分は、親譲りの財産は別にして、自分が儲けた金は全部社会のために使い果たすつもりでいる」と語ったといわれる。この研究所は大内兵衛、榎田民蔵といったマルクス経済学者を所員に迎え、また所長の高野岩三郎を先頭に社会調査や経済学・統計学の古典の翻訳の刊行によって、日本の社会科学の発展に大きな足跡を残した。

福沢諭吉は「人生の樂事」という短文で、自分のやりたいことは立派な学者を集めて研究所を作り、なにも注文をつけずに研究に専念させることだと書いたが、大原は福沢の理想を実行に移した経営者だった。

大原が創設した農業研究所は第二次大戦後、岡山大学に移管された。近年になって資源生物科学研究所と改称したこの研究所は一九九五年一月に創立八〇周年の祝賀会を開き、私は祝辞を申し述べるように求められた。残念なことに、大地震の直後で祝賀会に列席することはできなかったけれども、学術研究と



社会改革の結びつきを深く考え私財を投じて、二つの研究所を
設立した大原孫三郎という骨太の経営者の足跡を知ることがで
きたのは望外の喜びだった。

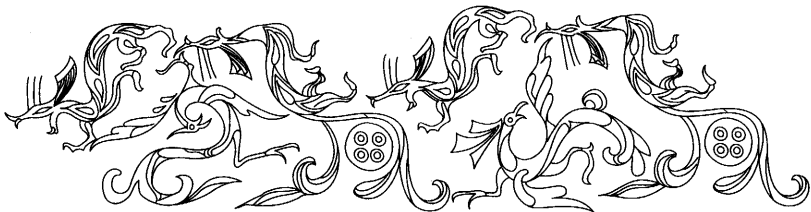


新しい京都駅

フィリップ・ハリス

去年の秋、新しい駅の建物をくぐって京都に着いた。しかし新しい建物だとは、ほとんど意識しなかった。空の長旅に疲れ、荷物にかまけ、さらにその夜泊まる予定の、駅の南側のホテルに早くたどりつきたかったからか。同じ日、暮れてから、北側の駅正面の方へ廻ってみた。しかし前面の黒々とした巨大さを見たというより、感じたのみであつた。宏大な入り口を通り、大階段をその規模に驚きながら登ってみた。しかし、薄暗い照明も手伝い、近くの人や物ばかりに氣をとられ、建物の内部のひろがりやデザインを見忘れた。

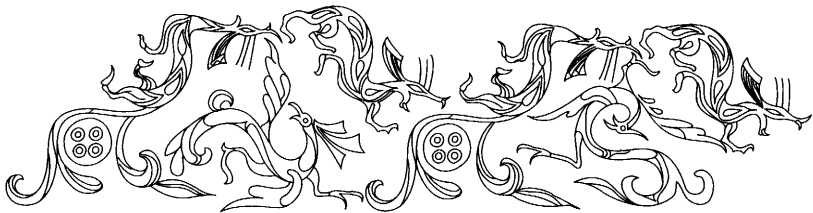
つづく数週間のあいだ、京都駅を何度か利用した。しかし、地下鉄から汽車へ乗り継ぐと急いだため、その建築をよく見ることは依然なかった。外側の一部は目にしたものの、全体を視野のなかにうまく納める場所に行きあたらなかった。おそらく、ほとんどの人にとってそうなのだろう。なによりも汽車やバスに遅れないことが肝腎で、立ち止まって眺める暇も関心もないのが普通だから。



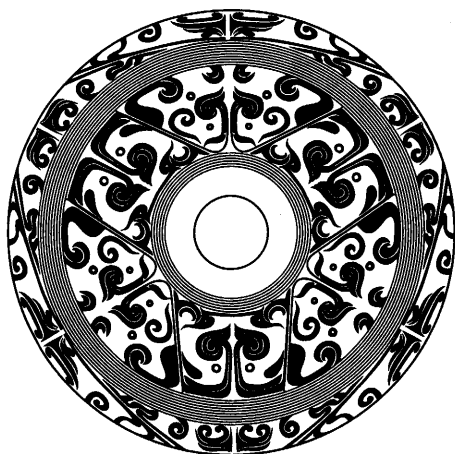
この建物の内部を実際に知ることになったのは、四カ月ほどしてからであった。旅行ではなく、ある美術展のためにそこへ出かけた折のことである。まっすぐ伊勢丹百貨店に入ったつもりが、ふと気付くと、あの巨大な吹きさらしの階段の三分の二の高みに出ていた。驚き、嬉しくなつて、とにかくもつと調べてみたい気持ちがつのり、思わず歩き回つた。

やがて気になりだしたのは、デザインのこと、そしてこの建物が実際には何の目的に役立っているのかということだった。答は、建物自体が目的で、それ以外にはないということかと思われた。たまたまそれが駅であつただけのことなのか。京都の「玄関」と称されるものの、さてそれを象徴するような形かどうか。思うに、新しい駅の建物が何かを象徴しているとすれば、それはこの町の自己意識ではないだろうか。京都は躍動的で、千二百年たつてもまだ発展中で、そしてもし新しい大きな公共の建物が必要なら、それは壮大で力を感じさせるものでなくてはならない、といった気負いか。

じつはそこに不安の種が宿る。誰の力、どのような力を象徴しようとするのか。たぶん、まともな建築であることの証は、このような対話をかき立てるかどうかにあるのだろう。ようやく外の通りへと向かいながら、ふと気付いたことがある。たしかに目的について不安を感じたけれども、現代建築にたえずまわりつくあの悪夢には悩まされなかった——畏にかかり、出られないというあの感覚にはとらえられなかった、と。新しい



駅の建物は並外れて入りやすく出やすい。あるいは、あれこれ考えたものの、その本当の目的は、ただ駅らしく、乗り降りの客の行きかう建物を、ということであったのか。



分館改修を終えて

曾布川

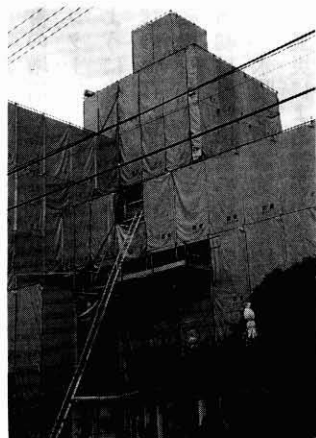
寛

北白川の分館の建物は昭和五年の創建から既に六〇余年を経た。その間、スパニッシュロマネスク風の名建築は東方文化学院、東方文化研究所、人文科学研究所本館、分館と変遷を重ねる一方、東洋学の分野において多くの研究者を産み出してきた。しかし、さしもの名建築も寄る年波には勝てず、近年は随所で老朽化が目立ち、加えてそれに追い打ちをかけたのが先の阪神大震災であった。

平成八年三月、突然沸き起こった大改修の話は、かねて図書増加による書庫の拡張を迫られていた分館、東洋学文献センターにとつて願ってもない朗報であった。だが、どこをどのように改修するのか。昭和初期の歴史的建造物である以上、原状の保存にとめねばならぬのはもちろんのこと、また緊縮財政の折、メンテナンスフリーに対する配慮は至上命令であった。当初は暗中模索の状態であったが、施設部との協議、改修委員会、水曜会と議論を重ね、計画は次第に煮詰まっていた。

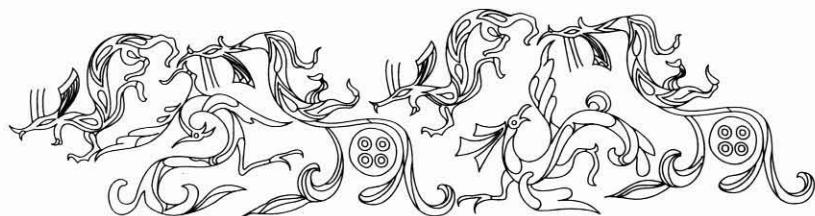
震災による被害が意外と少なかったのは幸運であった。地震





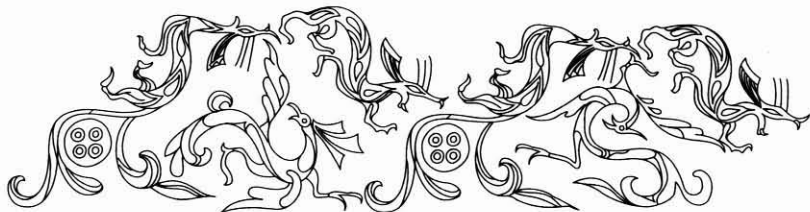
屋根裏、管理人棟、応接・会議室などである。地下室は書庫専用に改造して、貴重書庫、集密書架などを新たに設置し、木造和風の管理人棟も内部に集密書架をいれるという荒療治をした。図書収納スペースはかなり増えた筈である。またスペースの有効利用という点では、研究棟の屋根裏を倉庫として使えるよう改造を加えた。もともと研究棟は将来二階が積めるように設計がなされており、床は鉄筋コンクリートで十分頑丈に作られていた。おかげで階段室用に研究室を一つ犠牲にせざるを得なかったが、延べ百メートルにも及ぶスペースはそれ以上に利用価値のあるものであった。旧応接室と旧所長室の間の壁を取り払い会議室としたのは、旧所長室は内装が立派であるにもかかわらず、入口の問題からデッドスペース同然になっていたからである。その結果、旧会議室の方を応接と情報機器の二室に仕切ったのである。

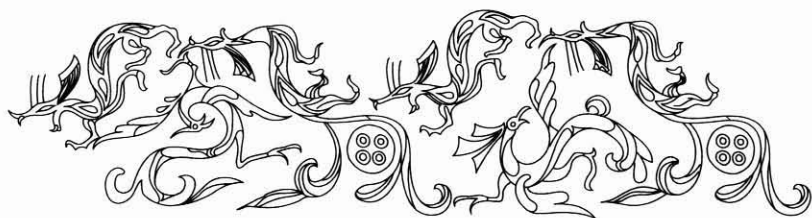
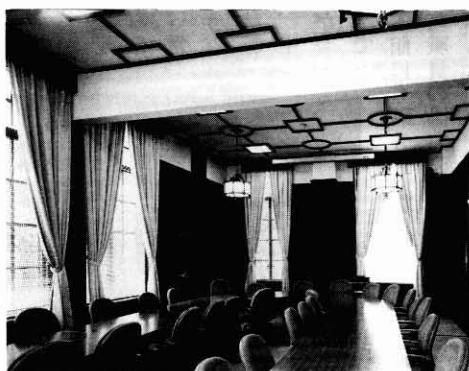
に対する強度が再検証され、予定していた耐震対策の費用をだいぶ削ることができた。屋根・窓枠などの外装、電気・水道・ガス設備の改修は別にして、大改造を加えたのは地下室、



改修に当たり最も厄介な問題は、研究室内部の改装に伴う大量の書籍、什器等の移転であった。移転場所が限られていたので、工区を幾つかに分けて順繰りにせざるを得ず、そのため半年余りの間、常に移転を繰り返しているという有様であった。ホールや廊下が移転図書用の木架で埋め尽くされ、中庭が什器用のプレハブでふさがったのも、今となつては語りぐさである。

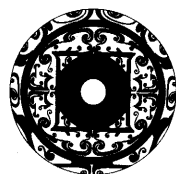
移転では附属図書館、本館にも随分迷惑を掛けたが、何とか無事済んだのは所員、事務職員の協力の賜物と言わざるを得ない。また空調の室外機（ガスヒーポン）の騒音対策も厄介な問題であった。以前より周囲の住民から苦情が出ており、改善するとすればこの機会であった。一転、二転したあげく、東側収蔵庫の両側に移し防音壁で囲むことで決着した。まだ十分とは言えないが、諸々の事情を考慮し、これができ得る最大限のことであった。何はともあれ、将来にわたって、分館が無事使用に耐えられることを祈るばかりである。





講演

退官記念講演



三月十三日
於 京大会館

王安石の周辺

—— 宋代の史料

梅原 郁

一応は宋代が専門ということにしてある私が、四十年間、最も繙く機会が多かった書物は、南宋李燾の手になる『続資治通鑑長編』であろう。とくに王安石の改革が行なわれた、神宗熙寧年間の記述は印象的である。そこでは、神宗皇帝と王安石が二人だけで会話を交す場面がしばしば現われる。会話の中味は齒に衣を

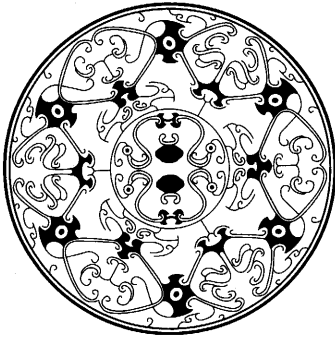
着せぬ、極めて具体的かつ、肚の中を探り合う、それでいて信頼関係の上に成りたったもので、安石優勢ながら、二人の火花を散らすやりとりが直接伝わってくる。余人の伺い得ない筈の、こうした二人だけの会話をどうして李燾が書き残し得たのか。

神宗と王安石時代の根本史料であるべき『神宗実録』は政争のため二回書き変えられたが、紹聖年間に改められた『実録』は王安石の日記である『王安石日録』を根本の材料に使った。この日記は、安石が自分の死後焼き棄てるよう遺言していたものを、女甥の蔡卞が実録編纂所に持ちこんだいわくつきのものである。一般には非難囂々たる『日録』と、それにもとづく紹聖『神宗実録』の価値をも公平に認めようとする李燾の史眼によって、我々は上述の神宗と安石の対話に接することができるわけである。

『王安石日録』の内容については、北宋末の陳瓘が『四明尊堯集』で完膚なしに攻撃し、また楊時（龜山）にも『神宗日録辨』の批判がある。『日録』それ自身は現存しないが、これらを通じて、その大体を推測することは不可能ではない。『日録』のどこが悪いかを煎じつめると、安石があまりにも自分を中心に、事実を書き列ねているという点にゆきつこう。世の裏話とか真相という代物は、その殆んどはある一線は決し

て超えぬ紳士協定を暗黙の前提としている。神宗を批判し、自己の先輩・同僚のタブーとされるべき事実を書き記すことは、他人を傷つけると同時に自分の首をしめるに等しく、一般常識からも決して褒められたことではない。それを『日録』でやむにやまれず安石は実行しており、幸か不幸か安石の死とともにそれは焼却されなかった。

周知の通り王安石の評価については、歴史的な変遷があり、概して高い評価が与えられるようになった現在でも、その時々々の政治と絡んで複雑な様相をくり返す。私は一時代を代表する中国の政治家王安石の「なまみ」を知るためには、『長編』の中の『日録』と本格的に取組む必要があると考えている。



誰それはしかじかのことを知らない

谷 泰

コミュニケーションの機能は△伝達▽である。モース通信がその典型であり、△伝達▽の条件は、発信者と受信者間の記号変換コードの共有にある。言語的コミュニケーションも、能記と所記との結合コードの共有によって、メッセージ伝達は保証されている。こうした考えは、記号変換のコードの参与者間での共有(shared knowledge)を前提すること、コミュニケーションの機能、△伝達▽の可能性を説明する。そして他の文化的コードも同様の働きをするものとみなされ、民族学者はそれらの収集に努めてきた。

しかしこの考えは、われわれの現実のコミュニケーションを記述するに、適切かつ十分な認識枠組みだろうか。参与者間で、コード的知識が分有されていても、メッセージを産出／解読する各参与者間で、心的に措定する文脈想定が異なれば、誤解が生ずる。想定知の相互的一致の確信なしには、△それ▽の指示対象の同

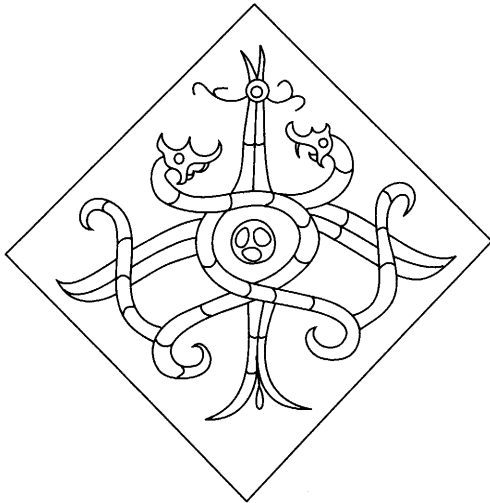
定さえ不可能だ。△伝達▽モデルは、この想定知の相互的一致、△相互知識▽前提の可能性を疑わない地平に成立している。しかし△相手の発話で相手_がなす想定_△について、わたし_がなすであろう想定_▽を相手は前もってチェックできるか。全知の透視力をもつ神の視点を、両者_がもつという、ナンセンスで実現不可能な状況がそこでは設定されている。クラーク&マーシャルは、かつて巧みな事例で、この△相互知識▽の前提不可能性を示した。

それにしても、他方、神の透視能力をもたずとも、多くの場合、相手の発話のメッセージ内容を適切に理解しているというのも、一般経験上の事実だ。スベルはそこで、関連性推論とでもいえる視点から、意図された情報の推定可能性を示し、コミュニケーションを、思考の伝達複製というより、認知環境の相互性を増すことだと言った。

ただ、会話をつうじて経験していることは、認知環境の相互性の増加に限られるか。会話資料に子細な眼を向けるとき、参与者の認知経験は、「△だれそれ▽（値域△他者／自己▽）は△しかじか▽のことを△知っている／知らない▽ことを、△わたし▽はいま知っている」と一般記述でき、伝達意図情報外の、相手の知らない情報が取得されうることを含むのである。そ

してこのような非伝達的な認知経験記述の視点によってこそ、サイド・シーケンスなどの会話調整、他者操作、チンパンジー以来獲得された笑いという表出能力が会話場面でなぜ花咲くことになったかの理由を、よく説明しうる。

退官まじか、「コミュニケーションの自然誌」という長期の共同研究を組んだ理由は、この種の子細かつ自然的視点が、人類学的認識にとってもつ重要性を意識してのことであつた。



夏期講座（一九九七年度）

七月四日―五日
於 本館会議室

「メイド・イン・ジャパンの亜細亜」あじあ

山室 信一
陶 徳民
安田 敏朗

今年度の夏期講座は、共同研究「日・中・朝間の相互認識と誤解の表象」班が、六月二七日から二九日にかけて八カ国四十名の参加者を得て開催した国際シンポジウムを承けて、共同研究の一端を発表するという形を採った。

共同研究のテーマはあくまで日本・中国・朝鮮の三極間に現われる相互認識におけるギャップや誤解がいかなる引照枠組の下で、どのような契機で形成され、それがいかに反復・伝承されることによって紛争が惹き起こされてきたかを洗い出し、それを前提として民族間相互認識の新たな枠組を創出することにあつた。

しかし、夏期講座では公開講座としての性格などを勘案して、日本人がいかにしてアジアについてのイメージを作り上げていったかに焦点を絞り、その様相をあまり出すためのテーマを選択した。以下、講演の要旨を列記する。

「アジア伝説——神功皇后からハリマオまで——」
（山室信一）

日本人に限らず、他者認識や異なった地域についてのイメージ形成については、直接見聞に基づくよりも歴史的に形成されてきてプロトタイプ化した像を受容し共有するという契機が大きく作用している。しかも、それらの多くは自己を優位に置き、他者を劣位に押し止めた^とという心理的機制の所産としてあるために、事実を歪曲し誇張を伴っている点で虚像にすぎない。しかし、その虚像こそが實在し、他者との交渉を規制していくのである。それゆえ、その創作された他者像を単に虚として斥けるのではなく、虚が虚であるがゆえに果たした社会的機能を明らかにしていくことが要請されるのではないだろうか。

そうした虚にして実なるものとして機能したアジア像が造型されるに当って、近代日本ではその地域と日本人の係わりについての伝説がきわめて大きな意義を

もった。その点を講演では、神功皇后やハリマオのほか豊臣秀吉や山田長政、源義経、西郷隆盛などの事例に即して検討した。また、逆に日本に向けて朝鮮やビルマ、インドネシアなどでいかなる伝説が流布し、どのように機能したかについても触れた。

「江戸期庶民の朝鮮像」(ロナルド・トビ)

日本人のアジア認識にとどまらず、隣国とその民族を見る目というものは、あくまで自分を見る目と一体のものであり、他者認識を通して自己認識の特性を析出することができる。こうした視点に立つとき、日本人の朝鮮像を友好と侮蔑という二つの対極的側面を排他的に捉えるのではなく、それらがいかに複合して総体としての認識として構成されていたかを考える必要がある。

講演者は以上のような視座を設定したうえで、まず、江戸期の日朝外交が制度的には「抗礼」として対等な形式を採りながら、日朝間で相互に相手を属国視していたことを解明し、続けてそれが庶民レベルでの捉え方とどう異なっていたのかを各地の城下町での祭礼の衣装や音楽、旗幟のほか絵本や歌舞伎などに読み取っていた。そして、さらに直接的接触という稀な体験の中で風俗・風習の違いが、大きな衝撃力をもって他

者像を形作っていった実例として肉食の問題が採り上げられた。それ自体、親善というイメージで語られることの多い朝鮮通信使との交流の中で、実は朝鮮人の肉食を目のあたりにしたことによって朝鮮人を異類視する見方が広がっていくというパラドックスを指摘するものであった。

しかし、講演ではその事実の指摘にとどまらず、仏教や神道にもとづく汚れの思想から肉食をしない日本人という自己認識をもとに朝鮮人を異類・不浄視した日本人が、にもかかわらず薬用と称して肉食をしていたという事実を対置させることによって、自己認識と他者認識の相関性のメカニズムが鮮かに示され、ここにこそ共同研究の成果をうかがうことができた。

「明治漢学者のみた儒教の祖国」(陶徳民)

古典を通じて得た「クラシカル・チャイナ」のイメージと、現実世界の中で見た西洋列強ないし日本に敗戦を重ねた「老衰帝国」のイメージとの対照は、明治の漢学者にとつてまさに刺激的な現象であったが、そこから憧憬と軽蔑との共存という近代日本のアンビバレンス的中國観の原型が生まれてきたと言われる。「明治漢学者のみた儒教の祖国」——重野成斎(一八二七—一九一〇)・岡千仞(一八三三—一九一四)・西村天因

（二八六五―一九二四）の所見——」という報告は、清仏戦争期、日清戦争後および日露戦争後の中国に足を運んだ三人の漢学者の見聞と所感を中心に、明治漢学者の中国観を検討するものであった。注目すべきは、これらの漢学者は「野蛮↓半開↓文明」という福沢諭吉の文明史論および西洋文明本位の論法に影響されると同時に、「政治無夷夏。時運有盛衰」という循環論的・相対主義的文明観の持ち主でもあった、ということである。訪問を通じて李鴻章・劉坤一・張之洞など政界のリーダーたちと親交を結んだ彼らの議論には、晩清の政治・科挙制度などに対する辛辣な批判がある一方、西力・西学東漸のもとでの中国のジレンマに対する同情的理解や中国における儒教伝統の存続と学校制度の近代化についての暖かい助言もあった。

「日本語論のなかのアジア像」（安田敏朗）

近代以降の日本語についての論じ方の中からアジアイメージを抽出しようと試みた。

まず、国民国家の道具立てとして要請された「国語」とは「国語でないもの」「方言」や「異言語」を設定していくことで確定され、確定されていった「国語」と「国語でないもの」とは様々な関係性のなかで語られていった。それはたとえば「系統論」であり、

「文明」対「野蛮」という図式であり、「指導」対「被指導」であり、「大東亜共栄圏」の「盟主」としてという構図であったりした。

他にも日本語と異言語との関係を説く論理は、「同系論」などといった言語学的な関心や、系統論や語彙の類似などから日本語の「世界性」を説くなど、その説き方は様々であったが、それは現実のその地域と日本との関係において日本の優位を保証するためにたてられた論理と相似するものであった。

さらに、一九三〇年代以降盛んに日本語簡易化論が唱えられるようになると、それと連関して諸言語の文字化も唱えられた。しかし、それが「大東亜共通文字」を求めた点や、識字率などの文化程度が低いからそれら諸言語の文字化が可能であるという認識があった点において、日本の「盟主」性を保証するものとされていた。また占領下東南アジアでの「現地語」の育成といっても、それは日本が理想としてきた「一地域一言語」という枠組から離れたものではない、日本側の恣意によったものであった。

つまり、日本語論のなかのアジア像とは、異言語が話されている地域に対する時代時代の風潮・認識から必ずしも自由ではありえなかったということになるのである。（以上、陶・安田が自らの講演要旨を、他は山室が記した。）

開所記念講演

(一九九七年度)

十一月六日

於 本館会議室

中世ヴェネツィアにおける市民の「家」

——都市国家理解に向けて

高 田 京比子

コムーネ(都市の自治政府)研究は中世イタリア史の重要課題であり、その制度的・経済的發展については、前世紀以来、多くの研究が行われている。が、自治政府を構成する市民の具体的な存在形態、彼らの生活と都市の公的な活動の絡み合いについては、従来十分な検討は行われていない。近年、中世のイタリア都市民にとって「家」・親族が重要な単位であり人的結合関係であったことが指摘されているが、このような視点から、都市コムーネの変遷を見直す研究は、まだ途上である。現段階では、各都市において史料を丹念に掘り起こす作業と、親族・「家」と政治や経済の関係を、ある一都市において、問題を限定して考察する

という作業を、徐々に積み重ねていくことが、コムーネを市民レヴェルで理解するために肝要であろう。本発表では、このような問題意識の下、場所をヴェネツィアに限定し、サン・マルコ財務官という財政と関係のある役所の発展を中心テーマとして、話を進めた。

十三世紀前半に成立した都市法の検討、十三世紀の標準的な支配層の家であるヴィアロ家のケース・スタディによると、当時の人々にとって、家族生活・特にその中でも財産処理の問題が切実であったことがわかる。女性に十分な財産を保証する、親族に不動産の優待購入権を認める、高い嫁資を払っても結局娘の結婚話をまとめる。このような家族生活にかかわる論理も、当時のコムーネを構成していた男性市民にとって、無視できないものだった。では、このような「家」の論理が実際、コムーネの制度的発達に影響を及ぼす場合があったのだろうか。

サン・マルコ財務官は、元はサン・マルコ教会の管財人であった役所である。コムーネの金庫番として徐々に重要性を増すと同時に、遺言執行人としての機能も発達させ、市民の遺産を管理することで多くの動産・不動産を所有するようになった。のちには、これら預かっていた遺産を公債に代えたり別の基金に回したりすることで、コムーネの財政援助にも利用され、

都市運営上重要な役所に成長していく。が、この役所に財産が集まったのは、何もムーネが強制的に集めたからではなかった。市民の遺言書や残存する法令史料は、市民の個々の家の要求が、この役所の遺言執行人としての発達を促したことを語っている。当時、家産の相続において、人々は、不動産の男系での保持・女性への財産保証・自分の魂の平安という三つの要求を満たさねばならなかった。そして十三世紀後半、商業活動が日常的で安定したものになり、投資について先の見通しが立てやすくなると、人々はより長期的で複雑な遺産の活用を考えるようになる。その中で、サン・マルコ財務官が、以前から不動産売買に携わっていたという点と、その永続性によって遺言執行人として頼られるようになった。また市民は、預けた遺産の投資を依頼することもあった。同時に、多くの遺産を預かり資金的に潤ったこの役職から、ムーネの一般市民は借り出しを行なうようになる。いわば、この役職を軸として、市民の家産運営とムーネの財政の間に、密接な共生関係が確立していったのである。こうして、市民の日常活動の実践がムーネの必要より優先的に、或る役職の仕事内容を増加させ制度的発達を促した過程が浮き彫りとなった。これは、家の視点を用いることによって、初めて可能になった事例である

う。今後他の行政機構などの発達を理解する際にもこのような視点は重要だと思われる。



一九三〇年代の日本とジェントルマン資本主義

——綿業通商摩擦問題を中心に——

籠谷直人

一九三〇年代の日本を考察する時に問題となってきたのが、大不況からの早期の回復（三二年後半から）と言う経済問題と戦争突入（とくに三七年の日中全面戦争への突入）という政治問題であった。前者は日本経済の強靱性という積極面として、後者は軍部主導の負の側面として把握されてきた。

三二年からの財政拡張による刺激と為替の切り下げを背景にした輸出の急拡大が経済の回復に貢献したことはよく指摘される。輸出の拡大が日本の綿製品を内容に、南アジア・東南アジアという英・蘭植民地を対象にしたところから、アジア市場を舞台にした日本と英・蘭との間の綿業通商摩擦問題が発生した。また三〇年代の世界経済は、英をはじめとする「ブロック」経済化という保護主義体制に転換しており、日本はますます世界経済のなかにおいて「孤立」化する傾向にあったと考えられてきた。通商摩擦問題の解消を企図

した「日印会商」（三三年）「日蘭会商」（三四年）もそうした日本の「孤立」化を防ぐには不十分であったと記されてきた。産業利害を侵害されると考える繊維企業家たちの英・蘭批判は過激となり、日本の孤立感へは閉塞感へと質を変えて行く。それゆえ三七年の戦争への突入は、孤立のなかで多様な選択肢を与えられなかった日本の「止むを得ない」選択であったとの「正当」化認識が当時のマスコミを通して流布された。そして現在の日本史研究においても、左右を問わず、こうした世界情勢と日本の戦争との関係を認識する姿勢が存在している。

近年の英帝国史研究が指摘するところでは、一九三〇年代の英の対アジア外交政策の基調は、繊維企業の輸出拡張を内容にした産業的利害にあったというよりも、むしろアジアからの毎年の支払いの円滑化にあったという。過去の政治借款や企業投資に対応した、利子・配当、そして政治的費用（英領インドの場合は「本国費」、蘭印の場合は恩給）の毎年の支払いが、滞ることなく維持されるべきであるという「サービス、金融」的利害の存在である。相手に自己の資産を貸し与えることによって生活する「ジェントルマン」層の利害こそが英の対外膨張の基調であったとする「ジェントルマン資本主義」論のメッセージであった（P.J.

Cain & A. G. Hopkins 〈秋田茂ほか訳〉『ジェントルマン資本主義の帝国』全二巻、名古屋大学出版会、一九九七年。アジアからの支払いの円滑化には次の二つの条件がアジア植民地に求められた。

(1) 支払いの源泉となる植民地の貿易黒字（輸出超過）の維持。

(2) 植民地通貨の割高な設定。

であった。とくに(2)は植民地通貨を強くすることで本国への支払いを容易にするものであったが、他方で植民地に対してはデフレ的環境を付与することになる。そうであるとすれば植民地には「社会政策」的な対応から低廉な日本製品が求められることになる。綿業通商摩擦問題を議論した会商の文書を見ると、討議された内容はこの二つの条件に関わるものであった。つまり(1)植民地の貿易黒字を維持する上で、日本はどれほどの第一次産品（棉花や砂糖など）を購入しうるのか、(2)低廉な日本綿製品の輸出量をいかに調製するのか、とくに蘭においては有益な日本品取引の機会をどの程度まで在アジア蘭商社に譲渡しうるのか、を討議する内容であった。有益な日本品取引を通して蘭商社の利益を回復させ、配当を回復させることに含意があった。綿業の産業的利害の調整であるかのように認

識された会商は、実はこれらの二点の問題解決を企図した国際政府間会議であり、綿業の問題は副次的なものであったと言えよう。英・蘭が日本綿製品の排除を仄めかしたのは、「1」の問題を有利に解決するための威嚇的条件にすぎなかったと理解できる。

日本政府はこうした二点を理解しており、英・蘭の金融的利害に配慮する外交姿勢を用意していた。三六年までの日本は政府間会議を通してアジアとの相互依存関係を弱めることはなかったのであり、世界経済からの「孤立」を選択したのではなかった。ただ政府間協定は公式、非公式を問わず、繊維企業家の意向をくむことなく取り決められ、なかには繊維企業家に一層の負担を迫る条件も含まれていた。必要でない原料の購入や輸出実績の蘭商社への譲渡を繊維企業に余儀なくさせたからである。政府と企業との間には大きな距離があったのであり、政治的基盤を失いかけたことが企業家の攻勢的論調をつくることになったのである。三七年の戦争突入の正当性を経済的孤立感から導き出すことは適切ではないことを講演では強調した。

大乘起信論批判

——阿梨耶識は如来蔵にあらず

荒 牧 典 俊

インド仏教思想史からみると原始仏教思想の根本思想である「縁起」とは、インド古代祭儀文化の墮落の極たる「輪廻の洪水」から解脱しようとして出家し禪定修行して、最深層の根拠は「深層の欲望」だ、「個体存在」を所有する自我意識だ、「意識の流れ」だ、とさとしたところで解脱した故に、それらの最深層の諸根拠をつなぎあわせて諸根拠の「時」的本性を究明しようとしている。したがって古い歴史の墮落を、いまこの有限な存在の「時」的本性として究明し、そのことによって解脱し超克しようとする哲学的真理である。

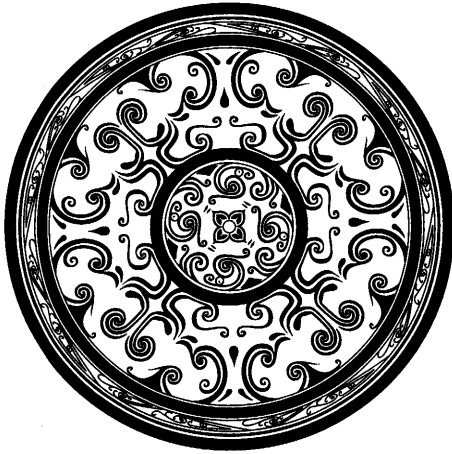
それに対して大乘仏教思想の根本思想である「空性」とは、三、四百年にわたる原始仏教の伝統も墮落してしまった「仏なき世」に、新しいしかたで仏にま見ようとするほめうた文学運動がはじまり、仏塔から仏像が出現して、いよいよ、ほめうたをうたいつつ三

昧のエクスタシーに入って仏を直証するという宗教体験が成立したところで、あらゆる諸仏を諸仏たらしめる根本真理——いっさいの分別を放捨しきった自由自在なる文化創造の根源のコミュニケーションとでもいうか——として体得されたものである。したがって新しい歴史の文化を創造する原動力としてはたらく哲学的真理である。

ところでナーガールジュナにはじまる大乘仏教哲学の展開において、前者、原始仏教の根本真理「縁起」が、いまこの有限なる存在の最深層の「阿梨耶識」の哲学へと発達していったのであり、後者、大乘仏教の根本真理「空性」が、いまこの有限なる存在の文化創造の原動力たる「如来蔵」へと発達していったのである。したがってそれら両者を、同じくいまこの有限なる存在の最深層にあるからといって、混同してしまうならば、古い歴史の墮落を、そのまま新しい歴史の文化創造力だ、と肯定することとなって、とんでもない保守主義の哲学となってしまう、そうして仏教本来の古い歴史を根本転回して、新しい歴史を創造するという革命的本質を見失わせることとなろう。

ところが中国仏教哲学、否、大乘仏教哲学の精華だと称讃されつづけてきた『大乘起信論』の哲学は、まさしくその「阿梨耶識は即ち如来蔵だ」という混同の

上に構築された哲学体系である（その混同は、漢訳された『楞伽經』に由来する）。というように批判しておかないと、『大乘起信論』の哲学にもとづいて展開した華嚴哲学や北宗禪が、六祖慧能の禪によって根本転回されなくてはならなかったこと、そしてそこから宋学が展開していくことも理解できなくなるのではあるまいか。



彙報 (一九九七年一月より十二月まで)

おくりもの

- 。大浦康介助教授は、フランス政府よりパルム・アカデミック勲章受章(一月十三日付)。
- 。太田武男名誉教授は、『現代の内縁問題』に対して、第九回尾中郁夫・家族法学術賞を受賞(三月二一日付)。
- 。Carmen Blacker 元外国人研究員(客員教授)ケンブリッジ大学上級講師は、第七回南方熊楠賞特別賞を受賞(四月十九日付)。
- 。井上 清名誉教授は、中国社会科学学院より名誉博士号を授与された(七月九日付)。
- 。安富 歩助手は、『満州国』の金融』に対して、第四十回日本経済新聞社経済図書文化賞を受賞(十一月三日付)。
- 。多田道太郎名誉教授は、平成九年度京都市文化功労者として表彰された(十一月二八日)。
- 。島田虔次名誉教授は、日本学士院会員

訃報

に選出された(十二月十二日付)。

- 。會田雄次名誉教授(八一歳)は、九月十七日逝去。

人のうき

- ・梅原 郁(東方部) 教授は、停年退官(三月三一日付) 京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)。
- 。谷 泰(西洋部) 教授は、停年退官(三月三一日付) 京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)。
- 。藤田隆則(西洋部) 助手は、辞任(三月三一日付)の上、大阪国際女子大学助教授に就任。
- 。石川禎浩(東方部) 助手は、神戸大学文学部助教授に昇任(四月一日付)。
- 。齋藤希史(日本部) 助手は、奈良女子大学文学部講師に昇任(四月一日付)。
- 。横手 裕(東方部) 助手は、千葉大学文学部助教授に昇任(四月一日付)。

- 。山本有造教授(日本部)を当研究所長及び附属東洋学文献センター長に併任(四月一日〜一九九九年三月三一日)。
- 。麥谷邦夫(東方部) 助教授は、教授に昇任(四月一日付)。
- 。高田時雄(東方部) 助教授は、教授に昇任(四月一日付)。
- 。山路勝彦関西学院大学教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九八年三月三一日)。
- 。鈴木祥二名古屋大学助教授は、併任助教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九八年三月三一日)。
- 。小林博行氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)。
- 。濱田麻矢氏を助手(東方部)に採用(四月一日付)。
- 。梶浦 晋氏を助手(附属東洋学文献センター)に採用(四月一日付)。
- 。新井晋次(東方部) 助手は、六月三十日付辞職。
- 。安富 歩(日本部) 助手は、名古屋大学情報文化学部助教授に昇任(十一月一日付)。
- 。眞下裕之氏を助手(東方部)に採用

(十一月一日付)。

。高嶋 航氏を助手(東方部)に採用
(十一月一日付)。

。石川 慎浩助手(東方部)は、一月七日
大阪発、社会科学院近代史研究所、社
会学研究所、北京図書館、北京大学、
中央大会址記念館、上海図書館、上海
市檔案館に於いて中国近代史関係資料
調査及び収集を行い、一月十八日帰国。
。山室信一助教授(日本部)は、文部省

科学研究費補助金により、平成八年十
二月二一日大阪発、シンガポール周辺、
イスタンブール周辺、コロンボ周辺、
香港市内に於いて地域開発と異文化共
存に関する実態調査研究を行い、一月
二五日帰国。

。岡村秀典助教授(東方部)は、一月二
十日大阪発、四川省文物考古研究所に
於いて三星堆出土品の調査、上海博物
館に於いて文物の研究を行い、一月三
一日帰国。

。木島史雄助手(東方部)は、一月二七
日大阪発、ウィーン大学、ウィーン国
立図書館、美術史美術館、ハイデルベ
ルク大学、グーテンベルク印刷博物館、

ラウレンツィアナ図書館、マルセリア
ナ図書館、サンマルコ修道院、ウフィ
ッツィ美術館に於いて東西の書物及び
書物史の研究資料収集を行い、二月十
八日帰国。

。籠谷直人助教授(日本部)は、二月十
五日大阪発、シンガポール国立大学に
於いて研究会「一九三〇年代のシンガ
ポールにおける日本」に参加、二月二
十日帰国。

。木島史雄助手(東方部)は、二月二一
日大阪発、上海博物館に於いて石経に
関する研究資料収集を行い、二月二四
日帰国。

。田中 淡教授(東方部)は、二月二二
日大阪発、山西省平遙古城に於いて平
遙古城のユネスコ世界遺産選定に伴う
現地調査、ユネスコ中国委員会に於い
て調査打合せ及び調査報告を行い、二
月二八日帰国。

。梅原 郁教授(東方部)は、文部省科
学研究費補助金により、三月二日大阪
発、インド国立博物館に於いてスタイ
ン将来中央アジア資料の調査及び資料
収集を行い、三月十日帰国。

。富谷 至助教授(東方部)は、文部省
科学研究費補助金により、三月二日大
阪発、インド国立博物館に於いて中央
アジア出土資料調査、スウェーデン民
族学博物館に於いてスウェーデン・ヘディ
ン関係資料の調査及び研究打合せを行
い、三月十三日帰国。

。楽山正進教授(東方部)は、三月九日
大阪発、ブリティッシュ・ライブラ
リーに於いてガンダーラ寺院資料の収
集を行い、三月十七日帰国。

。高田時雄助教授(東方部)は、文部省
科学研究費補助金により、三月十三日
大阪発、ローマ国立図書館に於いて漢
籍調査を行い、三月二四日帰国。

。船山 徹助手(東方部)は、文部省科
学研究費補助金により、三月十六日大
阪発、プリンス・オヴ・ウェールズ博
物館、インド国立博物館、マトウラー
博物館に於いて遺物調査、サレンチー
遺跡に於いて仏教寺院遺跡調査を行い、
三月二五日帰国。

。稲本泰生助手(東方部)は、文部省科
学研究費補助金により、三月十六日大
阪発、プリンス・オヴ・ウェールズ博

博物館、インド国立博物館、マトウラー博物館に於いて遺物調査、サンチー遺跡に於いて仏教寺院遺跡調査を行い、三月二五日帰国。

。金 文京助教授（東方部）は、三月二十日大阪発、高麗大学校言語文化研究所、ソウル大学に於いて研究資料収集及び意見交換を行い、三月二八日帰国。

。大浦康介助教授（西洋部）は、在外研究員旅費により、平成八年六月一日大阪発、フランス国立科学研究所センターに於いて文学・芸術理論に関する研究を行い、三月三一日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、三月十八日大阪発、シンガポール国立大学に於いてシンガポールの社会科学の現状についての調査及び学術交流を行い、三月三一日帰国。

。藤井正人助教授（西洋部）は、三月二十日大阪発、パニヤール村近郊に於いてサーマヴェーダ伝承に関する研究調査を行い、四月七日帰国。

。狭間直樹教授（東方部）は、三月二八日大阪発、中央研究所、近代史研究所、

台湾大学、台北師範大学、屏東師範大学に於いて中国近代史に関する研究資料収集及び交流を行い、四月十日帰国。井狩彌介教授（西洋部）は、委任経理金により、四月三日大阪発、トリチュール近郊、バンガロール近郊、マイソール大学図書館、ハンビ近郊、マドラス大学写本図書館に於いて「ヴェーダ伝承」と写本調査を行い、四月二八日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、四月二十五日福岡発、荊州博物館に於いて城郭遺跡の陰湘城発掘調査打合せ及び遺物整理、銅緑山博物館に於いて資料整理及び資料調査、北京大学に於いて発掘打合せを行い、五月九日帰国。

。稲本泰生助手（東方部）は、七月二七日成田発、龍門石窟に於いて古陽洞調査を行い、八月二日帰国。

。谷井陽子助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月一日大阪発、中国社会科学院歴史研究所、遼寧省檔案館に於いて明清時代中国の地方檔案の調査を行い、八月十四日帰国。

。前川和也教授（西洋部）は、委任経理

金により、七月十四日大阪発、大英博物館に於いて館蔵シュメール楔形文字テキストの研究を行い、八月十八日帰国。

。富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月六日大阪発、武威市博物館、山丹博物館、居延一帯、嘉峪関博物館、敦煌一帯、省博物館に於いて漢代遺址の調査を行い、八月二十日帰国。

。北垣 徹助手（西洋部）は、委任経理金により、七月十七日大阪発、フランス国立図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館に於いて第三共和政期の新カント派共和思想に関する文献調査及び資料収集、パリ社会科学高等研究所レーモン・アロン政治研究センターに於いて情報交換を行い、八月二日帰国。

。山室信一助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、八月一日大阪発、香港市内、カルカッタ周辺、バクタクラ周辺、デリー周辺、シンガポール周辺、インドネシア周辺に於いて地域開発と異文化共存に関する実態

調査研究を行い、八月二三日帰国。

。岩井茂樹助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月三日大阪発、中国社会科学院歴史研究所、中国第一歴史檔案館、四川省檔案館、四川省図書館、上海図書館に於いて清代檔案及び史籍調査を行い、八月二三日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、七月二三日大阪発、大英博物館に於いて人類学部門所蔵写真の研究を行い、八月三一日帰国。

。勝村哲也助教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、八月二五日大阪発、タマサート大学、シンガポール大学に於いて漢字データベースの国際交換システム構築を行い、八月三一日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月二十日大阪発、中国社会科学院考古研究所、洛陽工作站、河南省文物考古研究所、安陽工作站、北京大学に於いて中国古代都市の考古学的調査を行い、九月三

日帰国。

。高田京比子助手（西洋部）は、七月二十日大阪発、バドヴァ大学史学科に於いて中世史の研究セミナーに参加、ヴェネツィア古文書館に於いて中世ヴェネツィア社会史に関する史料調査、ボローニャ大学に於いて打合せを行い、九月七日帰国。

。森本淳生助手（西洋部）は、九月一日大阪発、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーと同時代思想に関する研究を行い、九月三十日帰国。

。木島史雄助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、十月二十日大阪発、ソウル大学校奎章閣、ソウル国立中央図書館、高麗大学校、延世大学校、誠庵文庫、故宮、ソウル国立中央博物館に於いて新漢字コード系構築のための資料収集を行い、十月二四日帰国。

。小林博行助手（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、十月二十日大阪発、ソウル大学校奎章閣、ソウル国立中央図書館、高麗大学校、延世大学校、誠庵文庫、故宮、ソウル国立中央

博物館に於いて新漢字コード系構築のための資料収集を行い、十月二四日帰国。

。金 文京助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、十月二十日大阪発、ソウル大学校、高麗大学校に於いて所蔵書籍の閲覧及び調査を行い、嶺南大学校に於いて中国文学文体論的再照明国際学術大会参加及び論文発表を行い、十月二七日帰国。

。安富 歩助手（日本部）は、平成八年十月二九日大阪発、ロンドン大学経済学部附属サントリイ・トヨタ国際センターに於いて「両大戦間期の上海金融市場」についての調査研究を行い、十月二八日帰国。

。高田時雄教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、十月二八日大阪発、ローマ国立図書館、フィレンツェ国立図書館、キヨソネ博物館に於いて漢籍調査を行い、十一月十一日帰国。

。勝村哲也助教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、十一月十七日大阪発、サンフランシスコ市立大学パークレー校に於いて

て「楊守敬図並びに嘉慶同光疆域図の電子化についてのワークショップ」に出席、スタンフォード大学に於いてヨーロッパ人のアジア探險に関する資料収集を行い、十一月二五日帰国。

。龍谷直人助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月二五日大阪発、中央研究院近代史研究所、国立中央図書館台湾分館に於いて南洋華僑に関する国際共同研究のあり方についてのレビューを受け、十一月二九日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月八日大阪発、荊州博物館、北京大学に於いて陰湘城遺跡の調査及び検討を行い、十二月二日帰国。

。濱田麻矢助手（東方部）は、十二月三日大阪発、香港大学アジア研究センターに於いて International Conference on Hong Kong and Main China に出席、上海図書館に於いて資料収集、香港大学中文系に於いて七十周年記念学術討論会に出席し、十二月十三日帰国。

。金 文京助教授（東方部）は、十二月九日大阪発、香港大学に於いて七十周年記念学術討論会に出席及び論文発表を行い、十二月十六日帰国。

。横山俊夫助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、十二月二二日大阪発、福建師範大学に於いて琉中交流史に関わる歴史・民俗研究家によるレビューをうけると共に関連史跡の見学を行い、十二月二七日帰国。

外国人研究員

。Timothy Yun Hui Tsu シンガポール国立大学講師
台湾における日本植民地主義の研究
（比較社会客員部門）

期間 四月二八日～十二月三十一日
受入教官 田中助教授
。Philip Tudor Harries オックスフォード大学クイーンズ学寮フェロー兼東洋学部副部長
和歌における語法と修辭
（日本学客員部門）

受入教官 横山助教授
期間 九月一日～

一九九八年四月三十日

招聘外国人学者

。宋 鎮豪 中国社会科学院歴史研究所研究員
「中国古代の社会と技術」の研究

期間 三月二十日～十一月十九日
受入教官 田中教授
。周 東平 厦門大学法学部助教授
「六朝贓罪の問題」の研究

受入教官 富谷助教授
期間 四月一日～

一九九八年三月三十一日
。Joshua Andrew Fogel カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授
中国史・近代日中関係史の研究

受入教官 山室助教授
期間 六月一日～六月三十日
。Francoise Bottero フランス国立科学センター研究員
漢字の特質とその諸問題

受入教官 高田教授
期間 七月八日～一九九八年七月七日
。李 樹華 北京市園林科学研究所盆景研究室副主任（講師）

中国の伝統的庭園における植物の応用
と造園植物技術の歴史的研究

期間 八月一日～
受入教官 田中教授

。Juvia Kohn ポストン大学準教授
中国中世における道教の戒律の研究

期間 九月一日～十二月三十一日
受入教官 吉川教授

。謝 瀛春 国立政治大学新聞系教授

漢字を用いたデータベースの国際交換
に関する研究

期間 九月一日～十月十五日
受入教官 勝村助教授

。謝 清俊 中央研究院資訊科学研究所
研究員

漢字並びに漢字を用いたデータベース
の構築と国際交換の研究

期間 九月一日～十月十五日
受入教官 勝村助教授

。Gerhart Leins テュービンゲン大学
日本学研究所専任講師

近代日本の暦と大雑書についての基礎
研究

受入教官 横山助教授

期間 九月十六日～十二月十五日

外国人研究生

。傅 江 南京大学中国思想家研究中心
助理研究員

六朝時期の美術研究―出土文物を中心
として―

期間 四月一日～
受入教官 曾布川教授

。Michael Como
中国仏教の発達と聖徳太子信仰―彌勒
信仰と南嶽慧思を手がかりにして

期間 五月一日～
受入教官 荒牧教授

一九九八年三月三十一日

東洋学文献センター講習会

。一九九七年度漢籍担当職員講習会（漢
籍電算処理）

第一期（九月二十九日）
図書館とマルチメディア（講演）
大型計算機センター教授

東洋学文献類目の編纂とフォーマット
金澤正憲

ト（講義） 村田康彦

東洋学文献類目冊子体作成について
（講義）

大型計算機センター教授
金澤正憲

計算機処理入門（講義）
大型計算機センター教授

第二期（九月三十日）
漢字コードの話―漢字と外字の処理
―（講義）

大型計算機センター教授
金澤正憲

漢字典と漢字合成法（講義）
同志社女子大学非常勤講師

日中台における漢字コードの規格
（講義）
丹羽正之

大型計算機センター助教授
安岡孝一

漢字コードの問題点とISO 10646
UCS（講義）

学術情報センター教授 宮澤 彰

データベース検索（一）（実習）
第三日（十月一日）

中国仏典電子化の諸問題（講義）

花園大学教授 ウルス・アップ

最近のデータベースの動向（講義）

大型計算機センター助手

川原 稔

データベース検索（二）（実習）

第四日（十月二日）

情報ネットワークとインターネット
（講義）

大型計算機センター助教授

岡部寿男

インターネットによる情報サービス
（講義）

（講義）

大型計算機センター助手

石橋勇人

データベース検索（二）（実習）

第五日（十月三日）

大学間ネットワークの状況について
（講義）

（講義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

新メディアによる情報サービス（講
義）

（講義）

大阪市立大学教授

柴山 守

。一九九七年度漢籍担当職員講習会（初

級）

第一日（十一月十日）

漢籍の話（講演）

京都大学名誉教授

四部分類—経・史・子・集（講義）

荒井 健

第二日（十一月十一日）

経書（講義）

カードの作り方（講義）

実習（一）

木島史雄

梶浦 晋

第三日（十一月十二日）

正史（講義）

実習（二）

岩井茂樹

第四日（十一月十三日）

字書・類書・叢書（講義）

実習（三）

勝村哲也

第五日（十一月十四日）

新学部—現代中国図書目録（講義）

東京大学東洋文化研究所教授

岡本サエ

お客さま

一月十四日 高麗大学校民族文化研究所長 金興圭

(勝村、森賀が応接した。)

一月二十日 ストックホルム大学東アジア研究所教

授 Staffan Rosen、スウェーデン国立

民族学博物館東方部部长 Håkan

Wahlquist (阪上所长、梅原、富谷が応

接した。)

六月三十日 ソウル大学校人文大学国史学科教授

權泰億、中国社会科学院日本研究所副研

究員 金熙德、中国社会科学院民族研究

所副研究員 鄭信哲、復旦大学副教授

馮瑋、中華民国中央研究院近代史研究所

研究員 張啓雄、中華民国中央研究院近

代史研究所副研究員 黄自進、イリノイ

大学教授 Ronald Toby (山室、水野、

岩井、籠谷、安田が応接した。)

十月三十一日 中央研究院歴史語言研究所研究員

Enno Giele (紀安諾) (「中国辺境出土

木簡の研究」研究会に参加。富谷が応接

した。)

十一月七日 ワシントン大学教授 Richard Salo-

mon (井狩、荒牧、藤井が応接し、「大英博物館所蔵カロシテイ写本、紀元後一世紀のガンダーラ仏教研究の新資料について」講演を行った。)

「唐代の宗教」研究班

吉川 忠 夫

われわれの共同研究班が会読のテキストに取り上げたのは、唐の梓州慧義寺沙門神清撰の『北山録』。梓州は古の蜀の地の一中心であって、今日の四川省三台県である。

『北山録』が書かれた蜀は、宗教史上すこぶるユニークな土地であり、一癖も二癖もある仏教者を多数輩出した。唐代に先立って、北周の武帝の廃仏の黒幕となった衛元嵩は、そもそも蜀出身の還俗僧であった。唐代においても、蜀を出身地とし、あるいは蜀を活躍の舞台とした仏教者として、無住、馬祖道一、圭峰宗密などの名が思い浮かぶ。なかでも、成都保唐寺の無住の言葉と禪の伝統の記録である『歴代法宝記』は、副題を「定是非摧邪顯正破壊一切心伝」とするように、すこぶるラジカルな内容のもののだが、『北山録』の撰者の神清と無住とは、実はともに新羅僧の無相に教えを受けた相弟子であったのであって、『北山録』にはまぎれもなく『歴代法宝記』を意識したくだりがある。

ある。

そしてまた蜀には、後漢時代に由来する道教の濃密な伝統が受け継がれていた。そのことをうかがわせる記事は、僧伝類のなかにも散見する。たとえば、『続高僧伝』習禪篇に立伝されている益州淨惠寺の惠寛。惠寛の父は「三洞先生」であったといえ、道教教団の司祭であったのに違いない。『北山録』が道教とどのような関係を切り結ぶのか、そのことも私にとつては興味のあるテーマの一つなのだ。

木簡の墨跡をたどりながら

矢 木 毅

場違いな研究班に参加するようになって、かれこれ二年になろうとしている。学際的な共同研究を表看板とする研究所にあって、わが「辺境出土木簡の研究」班は、専ら簡牘研究の専門家のみを集めた「精鋭集団」なのであるから、「前近代朝鮮の政治制度と社会

制度」などという間の抜けた研究テーマを掲げる私などがこの研究班に参加することは、学際的というのを通り越して、実際場違い以外の何物でもない。

とはいえ、この中国漢代の木簡資料というものは、素人目にも興味津々の第一級の史料であるから、諸專家に導かれながらその釈読をするという作業も、必ずしも苦役一方とはならないのである。

写真図版を頼りに木簡の墨跡をたどりながら、「この字は何と読むのだろう」「いや、この釈読は間違っているぞ」などと議論を重ねているうちに、所定の二時間はたちまちにして過ぎ去ってしまう。そうした釈読の問題から始まって、中国漢代の辺境軍事組織や文書行政のあり方などを探っていくことが、今のところ参加者全員に共通する一応の研究テーマということが出来るであろう。

もとより班員個々人の関心は極めて多岐に互っている。その議論はしばしば思いも掛けない方向へと発展し、釈読そのものは一向にはかどらない。随分と悠長な研究班ではあるが、その研究成果はいずれ「敦煌漢簡」の注解として、また研究論文集として世に問われることになるであろう。

「植民地主義」と人類学

山路 勝彦

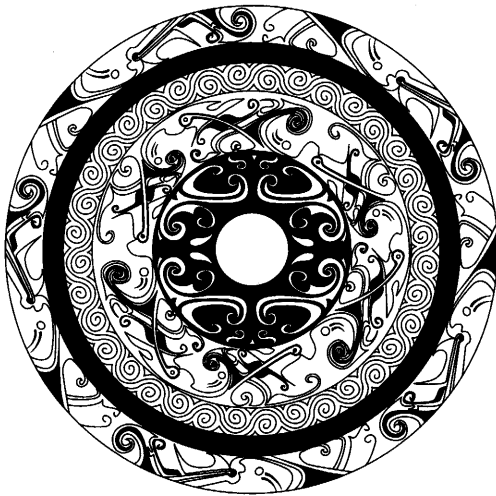
植民地主義をめぐる研究はいささかブームなのだろうか、人類学界でも話題を提供している。始まってまだ一年なので、これからの展望はしっかりしていないが、日頃考えていることを書き記してみたい。

もともとイギリスやフランスで開花した人類学は、それらの植民地を舞台に展開していった。植民地官吏が人類学を素養として身に付けていった例は少なくない。これに対して、英仏から人類学の理論と方法を学んだはずの日本は、人類学の実学的側面は希薄で、悪く言えば好事家的傾向が強かったと言える。朝鮮総督府や台湾総督府の調査報告にあまりにも記述本位な内容が目立つのも、こうした背景と無関係ではないのかも知れない。

人類学の専門家は特定の地域を専門としているため、かけ離れた地域の研究にはおおむね無知である。例えばアフリカの研究者は、インドや南太平洋には概して関心を寄せない。ところが、イギリスはこうした広範

囲の地域に植民地帝国を築き上げた。イギリスの植民地統治の実際が、どのように地域の実状を考慮して実践されていったのか、比較研究してみるのも大切なことである。

この主題は歴史や法学、文学その他、各方面から研究されている。人類学が今後どのような貢献をするのだろうか、今少し討論を重ねたい。



所のうち・そと

神戸と六甲

新井 晋 司

人文研に採用されたところ、中国科学史班の会説のさいに、神戸と六甲という地名は、もしかしたら中国の星座名に由来するのもかも知れないと思われる記事に出合ったことがあった。中国星座としての六甲は、北極星からそう遠くないところにあつて、現在のきりん座とケフェウス座にまたがる6個の星を指すと考えられる。唐代の瞿曇悉達^{くどうしつた}が編纂した占星術書『開元占經』は、約三百個の中国星座についても解説している。その書の巻六九で六甲という星座を説明して、「春秋緯に曰く、六甲中を輔と為す、物類を包羅し、神戸を為す」とある。六甲はまた「神戸」、すなわち神の戸、神様が出入りするためのドアでもあるというのだ。

通説では、地名の神戸は生田神社に税をおさめていた封戸・神戸^{かべ}に由来するという。また地名の六甲には二説あつて、一説は大阪の向こうにそびえる山の意で、「ムコ」に六甲という漢字をあてたとするもの。もう

一説は神功皇后が六個の甲（かぶと）を埋めたからというもの。かねてから、わたしはこれらの通説にさらに中国星座名からの影響を付け加えたいと、ひそかに考えているところである。

ところであの阪神大震災を中国占星術によつて考えると、こんなふうにいえるだろう。ある日、天上の神様はおもしろくないことがあつて、ブンブン怒つていった。そして腹立ちまぎれに「神の戸」をバーンとおもいつきり閉め、おもわずそのドアを破壊してしまった。そのときの激震は地上にも伝わつて、神戸の地に地震を引き起こしたのだと。

だとしたら神様もずいぶんと罪なことをしてくれたものだ。それならそれで、今後は神様には、神戸の復興がとどこおりなく達成されるようちゃんと見とけてもらいたいものである。そう、神様といえどもドアの開け閉めは静かにしてもらわなければ困るのである。

英国滞在の様子

安 富 歩

私は一九九六年三月二九日から一九九七年十月二六日まで London School of Economics and Political Science (LSE) の Suntory and Toyota International Centres for Economics and Related Disciplines (STICERD) に滞在した。このセンターはサントリーとトヨタが資金を出しているので、Drinking and Driving (酔っ払い運転) という渾名がついている。

このセンターで九七年の一月に西村閑也教授とセミナーを行って、その時に読んだ「満洲国」成立以前の金融に関する論文を STICERD からディスカッション・ペーパーとして発行した。五月にはシェフィールド大学の東アジア研究所とオックスフォードの中国研究所で報告したが、これらの内容は『満洲国』の金融」の粗筋であり、この論文もディスカッション・ペーパーとする予定である。

渡英以前から進めていたポピュレーション・ダイナミクスを題材とした自由度可変力学系についての研究は、日本にいる共同研究者との連絡がとりにくくなっ

たことや、持って行ったノートパソコンの故障のため著しく停滞したが、九七年三月にはロンドン大学のクイーン・メアリー・カレッジでその時点での成果を報告した。

一九九七年にはいつてからは大学にはあまり行かず、ミッドランド銀行にある香港上海銀行グループ資料室に通い、香港上海銀行のハルビン支店の活動を調査した。この研究は上海支店の調査のための準備運動のつもりで手掛けたのだが、予想外に長引いて、イングランド銀行資料室やジャーディン・マセソン商会資料(ケンブリッジ大学図書館所蔵)も調べて、結局、帰国直前に漸く論文の目鼻がつくという事態となった。この研究の内容はオックスフォード大学の中国研究所と香港上海銀行グループ資料室で報告した。

研究の面では留学の成果は一応挙げたと思っているが、もつと学生たちと一緒に授業に出たりスポーツをしたり、あるいは学会に出席して研究者の知り合いを増やすなど、現地の人々と付合う努力をすべきであったと後悔している。

イタリアの図書館

高田 時雄

ここ何年かイタリアの図書館で漢籍を漁っている。イタリアの図書館は何百年の古い伝統をもつところが多く、その重厚な雰囲気にはしばしば圧倒される。フオリオ判の大きな書物が鎖につながれて並んでいたりすると、まるで中世にタイムスリップしてしまったような気持ちになる。その床しさは例えようもない。

勿論いいことばかりではない。イライラさせられることも多い。その一つは、中国書や日本書のたぐいは、決まって写本部に入っていることである。欧米の図書館は、まずどこでも写本部と刊本部とはっきり区別されていて、前者はきわめて管理が厳しい。閲覧冊数の制限もある。といって大層な本が有るわけではない。ちんぷんかんぷんの分からない本は何か価値が有るのだろうと写本部に押し込められることになっているだけの話である。だから一冊の写本を年がら年じゅう写しているような人はいいが、調査のような場合には能率の悪いこと甚だしい。事情を説明しても、規則だからと取り合ってくれないことがほとんどである。さら

に写真撮影がスムーズに行かないことも辛い。マイク口撮影の設備を持っている図書館は少なく、多くが許可をもらった上で出入りの写真屋に依頼する。相当大きな図書館でもこのやり方である。だから、ここをこんな風にとりようという注文を出すのは非常に難しい。おまけに、仕事が早いとは決して言えない。たぶん一定の数が揃うまでは図書館へ足を運んでくれないのだろうと思う。万事がイタリア式である。

イタリアというと周囲は羨ましがるが、なかなか苦勞も多いのである。

ソウル訪書行と扶余の旅

金 文京

昨年の十月、文獻班のメンバーと共に秋深まるソウルへ図書館めぐりの旅に出かけた。初日、植民地時代の総督府が取り壊されたばかりの景福宮など王朝時代の旧蹟に遊び、翌日からは誠庵文庫、高麗大学、国立中央図書館、東国大学、そして李朝王室の蔵書を伝え

るソウル大学奎章閣と、主要図書館をまわって、高麗本、李朝の活字本をはじめ『李朝実録』など国宝級の文化財を数多く見ることができた。申し分のない眼福であったというべきであろう。三日間の予定を終えたのち、私はひとり南部の都市、大邱にある嶺南大学での学会に参加したが、最後の日、ソウルへ返る汽車を途中で捨て、かねて一度行ってみたいと思っていた扶余に寄った。かつての百濟王国の都である。その昔、唐、新羅の連合軍が日本の水軍を壊滅させた白村江は、町はずれの丘の上の泗泚楼に登れば眼下に見渡される。おりから行楽客でにぎわう樓上の欄間には「泗泚楼記」と題する樓の由来を漢文で記した額がかかっていた。見ると、中に二箇所消された部分があり、「憲兵隊長某氏」の名と「大正八年己未仲夏」の文字がかるうじて読み取れる。植民地の痕跡を一掃しようとする情熱は、総督府の破壊からこのような細部にまで及んでいるのである。歴史の抹殺、隠蔽はたして将来なにをうむであろうか。それとも過去の抹殺もまた歴史のひとつの事実であろうか。古戦場を眺めながら考えに耽っていると、いつのまにか秋の短い日は傾き、気がつけば私ひとりが樓上に残されていた。

凍ったきのこ雲

大浦 康 介

パリの一九九七年は凍てつく寒さのなかで幕を開けた。久しくフランスに行っていないなかつたせいもあって、経験したことのないような厳寒だと思われた。雪はほとんどないのだが、透きとおった空気が痛いほど顔に冷たく、路面はカチンカチンに凍っている。その上をおそるおそる歩く。目を開けているのも、息をするのもつらい。さすがに人影はまばらである。ふだんはかならず目にするホームレスたちも、路上はもちろんメトロの通風孔にもいない。日中でも気温は零下五度前後なのだから、野宿でもしようものなら命にかかわるだろう。報道によれば、年末から年始にかけてヨーロッパ全域を襲った大寒波でフランス国内だけでも三〇人の死者が出たという。路上にころがるパリ名物の犬の糞まで凍っている。ためしにひとつ蹴ってみようかなと馬鹿なことを考えたが、蹴り損ねてひっくり返る自分を想像してやめた。

こんな日にもいいことはあるものだ。人間どんなときでも絶望してはいけない。リュクサンブール公園に

さしかかったとき、絶景に遭遇した。公園の入口に近い交差点の真中には大きな噴水があるのだが、その水が四方に噴き出した形のまま完全に凍っているのである。あとからあとから湧き出る水が、蠟が垂れるように幾重にもかさなりつつ凍っていった様子で、まるで凍ったきのこ雲。あとで立ち寄ったエコール・ノルマルの中庭の噴水も見事に固まっていた。

数日後、ふたたびリュクサンブール公園の前を通った。噴水は凍ったままである。しかし、その日は寒さも幾分ゆるんだせいとか、氷のわずかな隙間から水が千々の細糸になって勢いよく噴出している。それに午後の陽射しが当たって、虹すら見えそうな気配である。暗く寒い正月に、僥倖のように映った光景だった。

オペラ座のストライキ

森 本 淳 生

昨年九月に一カ月フランスに滞在する機会を得た。
パレ・ロワイヤルの北、リシュリユー通り沿いにある

国立図書館で、ヴァレリーの草稿を調べるためである。パリに來たもうひとつの目的は何かいいコンサートに行くことだった。シーズンが始まったばかりだったが、幸い、モーツァルトの『フィガロの結婚』、プッチーニの『トゥーランドット』、それにワーグナーの『パルシファル』を見ることができた。特に『フィガロ』はそもそも名曲であるうえにスザンナを演じたソプラノのバーバラ・ボニーが素晴らしく、楽しい一夕を過ごせたが、同時に初めての経験にも遭遇することができた。それがオペラ座（バステイユ広場にできた新しいオペラ座）のストライキである。これはオーケストラの団員でも歌手でもなくオペラ座の裏方さんたちが起こしたもので、舞台装置、照明など音楽劇としてのオペラの「劇」に関する部分がすべて麻痺してしまふ。そのため上演も、椅子と、歌手たちのわずかな身振りだけで行なわれたのだった。しかし、俗に言う「抽象の具象」とでも言うべきか、視覚的要素を欠く分、音楽の方に注意を集中できてかえって純粹に楽しめたように感じた。そういえば、文楽も人形を見ずに義太夫だけ聞く方が好きで、夜、部屋の電気を消してふとんの中で越路大夫のCDをよく聞いたものだ。いずれにしても、このストライキを通して日本にも決して無縁ではないフランスの深刻な社会情勢を垣間見る

とともに、ちょっと貴重な「芸術体験」も得ることができた。

〈人文科学研究協会 研究奨励賞〉

雑感

高崎 隆 治

シベリア出兵に関する反戦文学という研究テーマを、十五年戦争下の戦争文学に変えたのは一九五五年であったから、すでに四〇年以上の歳月が経過している。だが、戦争というわく組みで言えば、戦後のすべてを戦争文学にこだわりつづけてきたことになる。

振り返れば、文学の研究を志しながら、やってきたことは文学以外または文学以前であったようだが、文学研究における「歴史社会学派」の立場からすれば、それは当然のことであつたろう。

具体的に言えば、たとえば『生きてゐる兵隊』（石川達三）を評価するにあたって、南京事件の究明は避けられない大前提であるが、それは文学研究の世界で

は最大のタブーであつた。南京事件調査研究会（会員二〇名）の中で、国文科出身は私以外にいないという事実がすべてを物語っている。

「食えなくなつたらどうするか」という忠告に、「食えなくなつたら食わなければいい」としか言えない人間に、先輩や知友はあきれはてた顔をしたが、正直に言えば、マスメディアはともかく、南京事件問題はアカデミズムからも忌避されるとは考えもつかなかった。したがって、人文科学研究協会の研究奨励賞は、私にとって晴天のへきれきで、「見ている者は見ている」と、若い友人が電話の向うで叫んだ声はいまも耳の底に残っている。

戦後半世紀、戦争文学研究にかかわる若い世代が何人も現われたが、しかしその人々が日中戦争期だけは避けているようにみえるのは、やはりタブーがいまも生きているからであらうか。

それはともかく、片岡良一に学んだ分析の方法で、戦場の文学者たちにとこまでアプローチできるかが私に残された最後の課題である。無数の研究テーマの中から私はそれを選んだのだが、賞を得たいま、私の欲しいものはや他になにもない。が、唯一、可能な時間だけは欲しいというのが本心である。

書いたもの一覧 一九九六年一月～十二月（氏名五十音順） ●は単行本）

飛鳥井 雅 道

公文庫）

中央公論社 四月

幕末維新の激動

『清水寺史』第二巻、法蔵館 五月

●京都市姓氏歴史人物大辞典（共編・朝尾直弘らと）

角川書店 九月

創立のころ

『京都教育大附属中学校五〇年史』十一月

荒牧 典 俊

縁起と本願と浄土

教化研究第一一七号（東本願寺教化研究所刊）六月

中國佛教とは何か——「祖師西來意」の意味するもの——中

國 社会と文化第十二号 六月

Happiness as a Historical Conversion, *International Institute for Advanced Studies Reports*, No. 1997-005. 六月

井 狩 彌 介

Vādhūla Śrautasūtra 1.5-1.6 [Agnihotra, Agnyupasthāna]

— A New Critical Edition of the Vādhūla Śrautasūtra, II, ZINBUN 31, 1996. 五月

井 波 陵 一

東方学報京都 六九冊 三月

●宋元戯曲考（訳注）東洋文庫

平凡社 十二月

岩 井 茂 樹

騎馬民族にとっての長城 しにか 八巻二号 二月

解説 堀川哲男『林則徐——清末の官僚とアヘン戦争』（中

中国に鉄道は必要か、近代中国の社会と論争 第一回 しにか 八巻四号 四月

「公課負担団体としての里甲と村」『明清時代史の基本問題』 汲古書院 十月

稲 本 泰 生

南京棲霞寺石窟試論——五世紀末～六世紀初頭の建康造像の位置づけをめぐって—— 仏教史学研究 三九—二 三月

優填王像東伝考——中国初唐期を中心に 東方学報京都 六九冊 三月

上 野 成 利

書評・M・ジェイ『力の場——思想史と文化批判のあいだ』 図書新聞 二月二二日

ホルクハイマーと〈母性的なるもの〉のユートピア——批判的理性とファシズムとの臨界点をめぐって 小岸・池田・

鶴飼・和田編『ファシズムの想像力』 人文書院 二月

哀切と痛切 京都朝日シネマニュース 一〇六号 三月

P・ド・マン「美学イデオロギー」——カントの唯物論」 批評空間 II—一三号 四月

（翻訳） P・ド・マン「美学イデオロギー」——カントとシラー」 批評空間 II—一四号 七月

「複数性」と《連帯》のポリティクス（セクション総括）

社会思想史研究 二一号 九月

P・ド・マン『美学イデオロギー(三)——カントとシラー(承前)』(翻訳) 批評空間 II—一五号 十月

●ルナン／フィヒテ／バリバール他『国民とは何か』(共訳) インスクリプト 十月

『痛切』さを感じること『ナヌムの家』を京都で観る会編『いま、記憶を分かちあうこと』 素人社 十二月

宇佐美 齊

フランス詩こぼれ話(連載) ふらんす 白水社 一月～三月
書評・中地義和著『ランボー』 図書新聞 一月

Les Métamorphoses du diseur du Moi (deuxième version), *L'Amitié Guérinienne*, bulletin périodique des amis des Guérin, No. 171, Printemps-Eté 1997. 五月

●象徴主義の光と影(編著)

ミネルヴァ書房 十月
中原中也の「幸福」訳をめぐって 特別企画展「中原中也とランボー」パンフレット 中原中也記念館 十月

書評・ミラン・クンデラ著『ほんとうの私』

産経新聞 十一月三十日

黄憲の絵【絵】

●フランス詩 道しるべ

大浦 康介

パリからの手紙——映像を添えて 336

アートジャパン・ネットワーク

(インターネット上のホームページ) 三～五月

第三夜——開かれたテキスト

漱石研究 八号 五月

サドが神を口にするとき 阪上孝編『統治技法の近代』

フランスの哲学ブーム 同文館 六月
「内的独白」の誕生——E・デュジャルダンの『月桂樹は刈られた』をめぐって 宇佐美齊編『象徴主義の光と影』

テキスト、パラテキスト『世界文学大辞典』第五巻 ミネルヴァ書房 十月

テレビのある風景1～8 集英社 十月

岡村 秀典

湖北陰湘城遺址研究(Ⅰ)(共著)

東方学報京都 六九冊 三月

●青銅器の図象記号による殷後期社会の研究

文部省科研費報告書 三月

龍の子孫たち——共同発掘／田植えの季節／古為今用／墓泥棒／レンガ／家畜との共生／ダチョウ料理／ベクトル／北京ダック革命 京都新聞 四～十二月

安満宮山古墳の青龍三年鏡出土

毎日新聞 八月七日

中国新石器時代の戦争(中文訳)

華夏考古 三期 九月

長江中流域における城郭集落の形成

日本中国考古学会会報 七号 十一月

戦国楚墓と出土漆器の共同研究

日本中国考古学会会報 七号 十一月

落合 弘樹

吉田清成関係文書第二卷（共編） 思文閣出版 二月

調布市史下巻（共著） 調布市 三月

籠谷直人

●孫文与華僑（共著）孫中山生誕一三〇周年記念

国際シンポジウム実行委員会 五月

●日本史広辞典（共著）

山川出版社 九月

一九四〇年代初頭の日本綿布取引をめぐるアジア通商網
人文学報京都 七九冊 三月

Japanese Cotton-textile Diplomacy in the First Half of the
1930s: The Case of the Dutch-japanese Trade Nego-
tations in 1934, *Bulletin of Asia-Pacific Studies* (Osaka
University of Foreign Studies), Vol. 7. 七月

知多木綿産地研究の課題と方法

日本福祉大学知多半島総合研究所 知多半島の歴史と現在
九号 十二月

木島史雄

学術行為の機能と広がり——隋・許善心のばあい——

東洋史研究 五六巻一号 六月

北垣徹

翻訳・『ラールス社会学事典』（共訳）

弘文堂 二月

Alfred Fouillée et l'idéal républicain, *ZINBUN* 31, 1996

三月

海外文化ニュース フランソワ・フュレの死

みすず 四三八 九月

金 文京

「S」の話 TONGXUE 十三号 同学校 一月

晚明山人之活動及其来源 中国典籍与文化九七年第一期

江蘇古籍出版社 三月

雅号とペンネーム 月刊言語二六—四 大修館 四月

『小川環樹著作集』第四卷解説 筑摩書房 四月

香菱考 東方学会創立五十周年記念東方学論集 五月

東アジアにおける中間的知識人の地位と活動 安定社会の総
合研究 京都ゼミナール 六月

中国における幸福の概念 Comparative Study of Happi-
ness 国際高等研究所 六月

中国民間文学と神話伝説研究——敦煌本「前漢劉家太子伝
（変）」を例として 史学六六—四号 三田史学会 七月

広東「木魚書」雑考——特に金蘭との関連について

野草 六〇号 八月

魯迅のいない中国近代文学史（書評・岡崎由美等著『武俠小
説』） 東方 一九六号 七月

六十年前の手紙——『吉川幸次郎全集』未収の文

ちくま 三一八号 九月

敦煌本《前漢劉家太子伝（変）》考 『饒宗頤学術研討会論文
集』 十一月

中国学最前線——俗文学 しにか 十八—十二 十二月

私のベスト3 東方 二〇〇号 十二月

高校生におくる今年の一冊 国語通信

筑摩書房 九七年三号 十二月

龍の子孫たち 4・8・12・16・20・24・28・32・36

海外手帳——香港——

京都新聞 四—十二月
共同通信 四—十二月

桑山 正進

A Hidden Import from Imperial Rome Manifest in Stupas.
In Alchin, F. R., B. Alchin, N. Kreitman and E. Errington (eds.), *Gandharan Art in Context: East-West Exchanges at the Crossroads of Asia*, The Ancient India and Iran Trust: Cambridge, 1977, pp. 119-171.

● The Main Sūpa of Shāh-jī-ki Dheri: A Chronological Outlook. Institute for Research in Humanities, Kyoto University: Kyoto, 1997.

Tapa Skandar. In *Enciclopedia dell'Arte Antica, Classica e Orientale. Secondo Supplemento 1971 - 1994*, V (Romana, Arte — Zuglio). Istituto della Enciclopedia Italiana: Roma, 1997, pp. 528-531.

小林 博行

書評・Christian Oberländer, *Zwischen Tradition und Moderne: Die Bewegung für den Fortbestand der Kanbō-Medizin in Japan*, Bulletin of the history of medicine, 71-2.

書評・三木成夫「ヒトのからだ——生物史的考察」

モルフォロギア 一九 十月

小南 一郎

小川環樹著作集第一巻解説
千宝「搜神記」の編纂(上) 東方学報 京都六九冊 三月

神亭壺に見る仏教受容の一樣相

東方学会創立五十周年記念論文集 六月
石鼓之製作の時代背景 東洋史研究五十六巻一号 六月

小山 哲

近世ポーランドの社会成層観 前川和也編著「ステイタスと職業——社会はどのように編成されていたか——」

消滅した国家ポーランド 岩波講座「世界歴史第十七巻 大洋洋革命 18世紀後半——1830年代」 ミネルヴァ書房 三月
岩波書店 十月

阪上 孝

モンテスキューとフランス革命 札幌日仏協会編「フランス革命の光と闇」

●統治技法の近代(編著) ボナバルチズムをめぐって「シンポジウムⅡ」 同文館 六月

佐々木 克

大政奉還と討幕密勅 人文学報 八十 三月
開国と幕末の動乱、文明開化 NHK教育セミナー「歴史でみる日本」 四月

曾布川 寛

「臨書と倣古画」解説 澄懷堂美術館 三月
碑碣の発生とその意味 書の宇宙 第五冊 二玄社 四月
「金石家の書画」解説 澄懷堂美術館 九月
隋唐の石窟彫刻「世界大美術全集」東洋編第四巻

高田 京比子 小学館 十二月

La storia delle donne in Giappone di Keiko Takada, Tomoko Takahashi, Noriko Onomoto, Noriko S. Yamabe (共著) *Agenda della Società Italiana delle Storie*, n. 19, pp. 8-17 十二月

高田 時雄 清代官話の資料について 東方学会創立五十周年記念

●漢字ワードボックス 東方学論集 五月
大修館書店 五月

●Supplément à l'Inventaire sommaire des livres chinois de la Bibliothèque Vaticane. 京都大学人文科学研究所東洋

文献センター叢刊第七冊

評・大島正二『中国言語学史』 しにか 八卷八号 七月

漢字の伝統と現在——中国—— 国際交流 七八号 十二月

新疆ウイグル自治区博物館 しにか 九卷一号 十二月

飲食店大繁盛、電子台曆、音訳語、三泡台、専門店街、古玩城、竹の用途、文革料理、石敢当、オークシオン

京都新聞朝刊「龍の子孫たち」 四〇十二月

武田 時昌 損益の道、持満の道——前漢における易の台頭

中国思想史研究 第十九号 一九九六年十二月
文史知識 八期 中華書店 八月

瀧井 一博

中国科技在日本 人文学報 三月
伊藤博文滞欧憲法調査の考察

遺伝子操作と法理論——遺伝子治療がもたらすもの／

「死」を法的に考える——脳死・安楽死・尊厳死（佐野誠氏と共筆）ともに、河上倫逸編「ゆらぎの法律学——規範の基層とそのダイナミズム——」 風行社 十二月

田中 淡

東大寺仏殿『日本の歴史・上』 文春文庫 一月

●中国造園史文獻目錄（編）（東洋学文獻センター叢刊第六冊）

京都大学人文科学研究所 三月

中国早期園林風格与江南園林实例 城市与设计 一期 六月
楊鴻勛「唐長安大明宮含元殿の復元的研究——その建築形態にかんする再論」（福田美穂と共訳）

佛敎藝術 二二三号 七月

監修・世界最大の古代都市長安 ニュートン別冊「新・世界の七不思議」 ニュートン・プレス 十一月

唐代の皇帝陵と壁画墓『世界美術大全集・東洋編』 第4卷

隋・唐 隋・唐 隋・唐時代の建築 小学館 十二月

作品解説・神通寺四門塔／永泰寺塔／安濟橋／南禪寺大殿／

仏光寺大殿／天台庵大殿／法王寺塔／薦福寺小雁塔／会善

寺淨藏禪師塔／九塔寺九頂塔／泛舟禪師塔／海慧院明恵大

師塔／崇聖寺千尋塔 同右

田中 雅一

インドの神々のイメージ 生活文化研究所編『心の文化と日本人——宗教とのつきあいと信仰』 啓文社 一月

神話の政治学——インド神話をめぐって

ユリイカ 二月号 二月

カースト社会に生きる 栗原彬編『講座差別の社会学第三巻 現代世界の差別構造』 弘文堂 二月

コメント・足立明編「総合的地域研究」成果報告書シリィズ・28『開発』とオリエンタリズム 文部省科学研究費

補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班 二月

二つのカースト・モデルと現世放棄——南インドのセンゲン

ダ・ムダリヤールをめぐって前川和也編『ステイタスと職業——社会はどのように編成されていたか』 ミネルヴァ書房 三月

ブックレビュー・宗教とナショナリズム 潮 八月号 八月

神の食事と人の食事——南インドの寺院調査から 人環フォーラム 第三号 九月

●『けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第八回研究会記録』（共編） 株式会社けいはんな交流部 九月

エクスタシーの時間——性的セクシュアリティ再考 横山俊夫・田中雅一共編『けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第八回研究会記録』 株式会社けいはんな交流部 九月

世界を構築するエロス——性器計測・女性の自慰・オーガズムをめぐって 青木保他編『岩波講座文化人類学第四巻 個からする社会展望』 岩波書店 十月

●『けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第九回研究会記録』（共編） 株式会社けいはんな交流部 十月

異文化の写真と人体計測 京都新聞一月二六日朝刊 一月

スリランカの漁民たち 国立民族学博物館編『民族学アラカルト——みんぱくゼミナールの20年』 国立民族学博物館 一月

富永茂樹

解題 河野健二『歴史を読む・2・現代史の展開』 岩波書店 一月

●ラルース社会学事典（共訳） 書評に应えて ソシオロジ 一二九号 五月

啓蒙の困難——主体、社会化、コミュニケーション 関西社会学会 五月

八回関西社会学会大会報告要旨 関西社会学会 五月

バスティーユからピセートルへ——ひとはどのようにして『市民』となるのか 阪上孝編『統治技法の近代』 同文館出版 六月

都市生活と文学——織田作之助の『大阪』 上田篤編『大阪の研究——もう一つの都市文化』 デコ 八月

精神療法の考古学『第一回精神医学史学会プログラム抄録集』 精神医学史学会 十二月

富谷至 長城はいかにして築かれたか（書評） 新田義之編『文化の諸相』 山陽新聞朝刊 四月二二日

新居延漢簡の整理『福武文化振興財団平成八年度年報』 狭間直樹 十一月

孫文の中國統一思想——とくに民族主義について

『孫中山記念館 十年の歩み』 孫中山記念館 三月

●孫文と華僑——紀念孫中山誕辰一一〇周年國際學術討論會論文集（共編著）

孫中山記念會 三月

關於『支那保全分割合論』の若干考察——孫文訪日初期革命活動的一個側面

『孫文と華僑』 孫中山記念會 三月

梁啓超『戊戌政變記』成書考近代史研究 第一〇〇期 七月

梁啓超研究と「日本」（張玉林訳）

近代中國史研究通訊 第二四期 九月

濱田 麻矢

『洋場』の「洋人」——張愛玲小説の外國人——

中國文學報 五十四冊 四月

張愛玲がすき！（訳）

中國文藝研究會會報 一八八号 六月二九日

同 一八九号 七月三一日

同 一九〇号 八月二七日

文學史と詩人に會えた合宿

中國文藝研究會會報 一九一号 九月三〇日

前川 和也

The governor's family and the "temple households" in Ur

III Girsu. K. R. Veenhof (ed.), *Houses and Households*

in Ancient Mesopotamia: Papers Read at the 40th Rencontre Assyriologique Internationale, Leiden, July 5-8,

1983. Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te

Istanbul.

三月

麦作農業史における古代メソポタミアの位置「世界地域學への招待」（平成七・八年度文部省特定研究〈地域研究の方

法的課題に関する研究〉報告書） 十二月

水野 直樹

浮島丸事件のゆくえ——殉難者追悼碑にこめられた思い——

グローブ（世界人權問題研究センター） 八号 一月

妄言を考える——植民地支配とその遺産——

第十回夏期セミナー報告書（KMJ研究センター） 一月

尹東柱と京都在住朝鮮人 尹東柱詩碑建立委員會編『星うたう詩人——尹東柱の詩と研究』 三五館 二月

在日朝鮮人・台灣人参政權「停止」条項の成立（続）——在日朝鮮人参政權問題の歴史的検討（二）——

世界人權問題研究センター研究紀要 二号 三月

在日朝鮮人の参政權はなぜ「停止」されたか

アリラン通信 一二号 三月

再論・戦後在日朝鮮人参政權「停止」条項の成立

朝鮮史研究會會報 一二六号 三月

戦時期の植民地支配と「内外地行政一元化」

人文学報 七九号 三月

京都の在日朝鮮人史——人權講座講演録一九九五年度

世界人權問題研究センター

●京都における朝鮮人の歴史・資料集（第1冊）（編）

世界人權問題研究センター

在住外國人問題を考える

研修情報（京都府職員研修所） 九四六号 九月

研修情報（京都府職員研修所） 九四六号 九月

第三海軍火藥廠朝来工場跡・在日大韓基督教京都南教会

人権ゆかりの地をたずねてⅢ

(京都人権啓発推進会議) 十一月

青丘文庫の紹介

書燈(神戸市立中央図書館) 二六一号 十二月

植民地時代の治安法と冷戦体制『東アジアの冷戦と国家テ

ロリズム——台湾シンポジウム報告集』(国際シンポジウ

ム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局)

十二月

森本淳生

Signe et opération : Une étude du formalisme valéryen à

l'époque des premiers Cahiers, ZINBUN, 31, 1996

三月

ヴァレリーと十九世紀末フランスの「有限主義」の系譜

関西フランス語フランス文学 三号 二月

書評・ジュディス・ロビンソン「ヴァレリー編『科学者たち

のボール・ヴァレリー』 仏文研究二八号 九月

翻訳・ピエール・ドゥヴォー「音楽と詩のあいだ——無音の

の除去と詩句の変質 宇佐美齊編著『象徴主義の光と

影』 ミネルヴァ書房 十月

安田敏朗

「国語」・「日本語」・「東亜共通語」——帝国日本の言語編

制・試論—— 人文学報 八〇号 四月

●植民地のなかの「国語学」——時枝誠記と京城帝国大学をめ

ぐって—— 三元社 四月

書評・イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言

語認識——』

民博通信 七七号 六月

書評・イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言

語認識——』 日本史研究 四二三号 十一月

●帝国日本の言語編制

安富 歩 創文社 二月

「満洲国」の金融 人文学報 七九号 三月

満洲中央銀行と朝鮮銀行 An Overview of Currency Struggles in Manchuria, 1895-

1931, STICERD/LSE, Discussion Paper No. IS/97/330,

June 1997.

山室信一

近代日本の統治と文化 国際交流 七四号 一月

転換期のアジア

三回連載 熊本日日新聞 二月十七日(二〇日

民族協和の幻像——満洲帝国の逆説 山内昌之他編『帝国と

は何か』 岩波書店 二月

政治社会における倫理——忘却と未至の間で 鶴見俊輔他編

『現代日本文化論9・倫理と道德』 岩波書店 五月

「アジア伝説」形成の解明を 毎日新聞 七月十日夕刊

祭りの記憶 アステイオン 四六号 九月

偏見直視から理解へ——シンポ「相互認識と誤解の表象」か

ら 朝日新聞 九月十九日夕刊

東京裁判の意義 五十嵐武士他編『「争論」東京裁判とは何

だったのか』 築地書館 九月

姜昌一他三名と座談会「アジアのナショナリズムはどのへ向かうか」
世界 六四三号 十二月

山本有造

「大東亜共栄圏」論

人文学報 七九号 三月

「満洲国」マクロ経済統計について ニュースレター「アジア長期経済統計データベースプロジェクト」五号

一橋大学経済研究所 四月

On Macro-economic Statistics for "Manchukuo", Newsletter of the Asian Historical Statistics Project, No. 5 Hitotsubashi Univ., Institute of Economic Research. 四月

「満洲国」国民所得統計について 一橋大学経済研究所中核的拠点形成プロジェクト Discussion Paper No. D97-6. 七月

「朝鮮」・「満洲」間陸境貿易論——地域間関係史のひとつの試み—— 年報・近代日本研究一九「地域史の可能性——地域・日本・世界——」 山川出版社 十一月

「満洲国」農業生産力の数量的研究 アジア経済 三八巻一二号 十二月

横山俊夫

「半木半読会」へのお誘い

「半木半読会」京都府総合資料館気付 一月

校訂・木田安彦「風雷房古物散歩」(日曜連載) 毎日新聞(関東版) 自一月十二日至九月二八日

監修・校訂／Culture of Japan: Karuta Familiarizes Players with Japanese Classical Literature, Sumitomo

Quarterly, winter 1997, No. 67.

編集・とうんばらー通信 3号(文部省科学研究費補助金、基盤研究(A)(1)) 人文科学研究所横山研究室 二月十七日

鼎談・二十一世紀の花鳥風月 その二、石／あやかる(樂吉左衛門・松井孝典両氏と) 中央公論 三月

校訂・四方哲也著「眠れる遺伝子進化論」 講談社 三月

共同起草・提言 平安建都一三〇〇年へ向けて(河合隼雄氏らと) ポスト二二〇〇年懇話会 三月

企画・監修／京都市きもの意識調査報告 きものはmode 京都市産業観光局 三月

対談・モードの街・京都をめざして(深井晃子氏と)／提言・着立てのまち、京都へ 同右書所収

報告・討論参加／シンポジウム 現代陶芸の国際性と土着性(柳原陸夫・P・グリーンハーフ・R・Aククタ・李慶成・乾由明各氏と) 国際陶芸アカデミー日本会議 96報告書(日英仏文) 同会議名古屋実行委員会 三月

色の道へとわけ入れば——非武装閉鎖空間の人間模様—— ホメオ京都 1 電通関西支社 三月

企画・討論参加・校訂／文化シンポジウム 21世紀・京都芸術探訪 風を創る(鎌田東二・加藤和人・武邑光裕・園田恵子・森口邦彦各氏と) 京都新聞 三月三〇日

書評・東田雅博著『大英帝国のアジア・イメージ』 イギリス帝国史研究会 Discussion Paper 第1号

同 研究会事務局 四月

監修・校訂／Culture of Japan: A Living Art Recreating

the Grandness of Nature in a Small Pot, *Sumitomo Quarterly*, Spring 1997, No. 68. 四月

第一回半半会、臼井史朗氏談「編集者の懺悔」を聴いて

総合資料館だより 百十一号

京都府立総合資料館 四月一日

共同編集・こうとうけん 十三号

財団法人国際高等研究所 五月

二十一世紀の花鳥風月 21世紀の関西を考える会会報 十号

同会事務局 五月十五日

編集・とうんばらー通信 4号 (文部省科学研究費補助金、

基盤研究(A)(1) 人文科学研究所横山研究室 五月三〇日

談・伝統新時代 第3部 4 京都新聞 六月十七日

大学と花鳥風月、京都総合研究所編『京都大学の世紀

1897～1997]

紫翠会出版 六月

企画・監修・校訂／Culture of Japan: From Daily Sundries

to Works of Art: Bamboo Craftsmanship, *Sumitomo Quarterly*, Summer 1997, No. 69. 六月

●編著・安定社会の総合研究——ことがおこる・つづく／なか

だちをめぐって——第八回京都国際セミナー(川那部浩

哉・藤井譲治・三浦國雄・遊磨正秀各氏と共同企画)

京都ゼミナルハウス 六月

鼎談・二十一世紀の花鳥風月 その三、花／おもむく(井上

民二・松井孝典両氏と) 中央公論 七月

山野博史氏談「虫ほしを待ちわびる本」を聴いて／小山喜平

氏談「吉田先生の踏査記——ホルムズとジャム」を聴いて

半半会だより 1号 京都府立総合資料館 七月一日

編集・とうんばらー通信 5号 (文部省科学研究費補助金、

基盤研究(A)(1) 人文科学研究所横山研究室 七月十六日

勤儉朴実——「現代のことば」 京都新聞夕刊 七月二二日

書評・東田雅博著『大英帝国のアジア・イメージ』

史学雑誌 一〇六編 七号 七月

花鳥風月図書館——「現代のことば」

京都新聞夕刊 九月十二日

共同執筆・京都の府民文化の未来を考える懇談会——21世

紀の風流を京都に—— 同懇談会(岡本道雄座長)より

京都府知事宛提出(京都府府民労働部文化芸術室より)『2

1世紀の風流を京都に』と題して十月公刊) 九月十八日

編集・とうんばらー通信 6号 (文部省科学研究費補助金、

基盤研究(A)(1) 人文科学研究所横山研究室 九月二二日

編著・けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」

——第八回研究会記録 株式会社けいはんな 九月

イギリス体験と日本 萩原延壽氏へのロングインタビュー

「国際交流」77／国際交流基金設立二十五周年記念号

国際交流基金 十月

企画・監修・校訂／Culture of Japan: Traditional Japanese

Confectionery Expresses the Aesthetics of the Seasons

in Appearance and Flavor, *Sumitomo Quarterly*, Autumn

1997, No. 70. 十月

21世紀の花鳥風月(右記七月発行の中央公論掲載鼎談の韓

国語記

日本辛酉(ソウル)三十一号 十月

編集・校訂/けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」——第九回研究会記録 株式会社けいはんな 十月
司会・記録校訂・「あとがき」執筆、国立国会図書館記・編
「21世紀の国立図書館——国際シンポジウム記録集」
1996東京/京都 日本図書館協会 十月

鼎談・二十一世紀の花鳥風月 最終回、人/いつわる——
揺らぐダーウィニズム(四方哲也・松井孝典両氏と)
中央公論 十一月

三才学舎「京大創立一〇〇年記念特集

京都新聞/第二集 十一月二日

再録・京都大学人文科学研究所蔵 日本関係欧文図書総覧
——1950年以前刊行分——、海野敏・小田光宏・岸田
和明・戸田慎一編『書誌をつくる』下巻
日外アソシエーツ 十一月

討論参加「ソフトサイエンスにかかわる調査研究/中間報告」(栗田靖之・別府春海両氏と) 関西インターメディア
株式会社社宛提出 千里文化財団 十二月

編集・とうんばら通信 7号 (文部省科学研究費補助金、
基盤研究(A)(1) 人文科学研究所横山研究室 十二月十七日
21世紀の花鳥風月(右記十一月発行の中央公論掲載鼎談の
韓国語訳) 日本辛酉(ソウル)三五号 十二月

吉川 忠 夫

●景德伝灯録研究会編『訓注景德伝灯録』四(卷一〇・一一・
一二) 卷一〇 普化和尚章他 禅文化研究所一月

「喪乱帖」を読む

墨 一・二月号 二月

石に託された永遠の思想 石川九楊編『書の宇宙』4

書評・川合康三著『中国の自伝文学』

中国文学報 五四冊 四月

皇甫謐の「篤終論」『東方学会創立五十周年記念東方学論
集』 東方学会 五月

書物がほしかった皇帝の話 文芸春秋 六月号 六月
社会と思想 谷川道雄他編『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問
題』 汲古書院 六月

『劉子』の著者について

中外日報 八月五日
東方宗教 九〇号 十月

『靈飛散方伝信録』の周辺

中外日報 社説 一五回 一十二月

人

文

第四四号

一九九八年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品